

17  
46



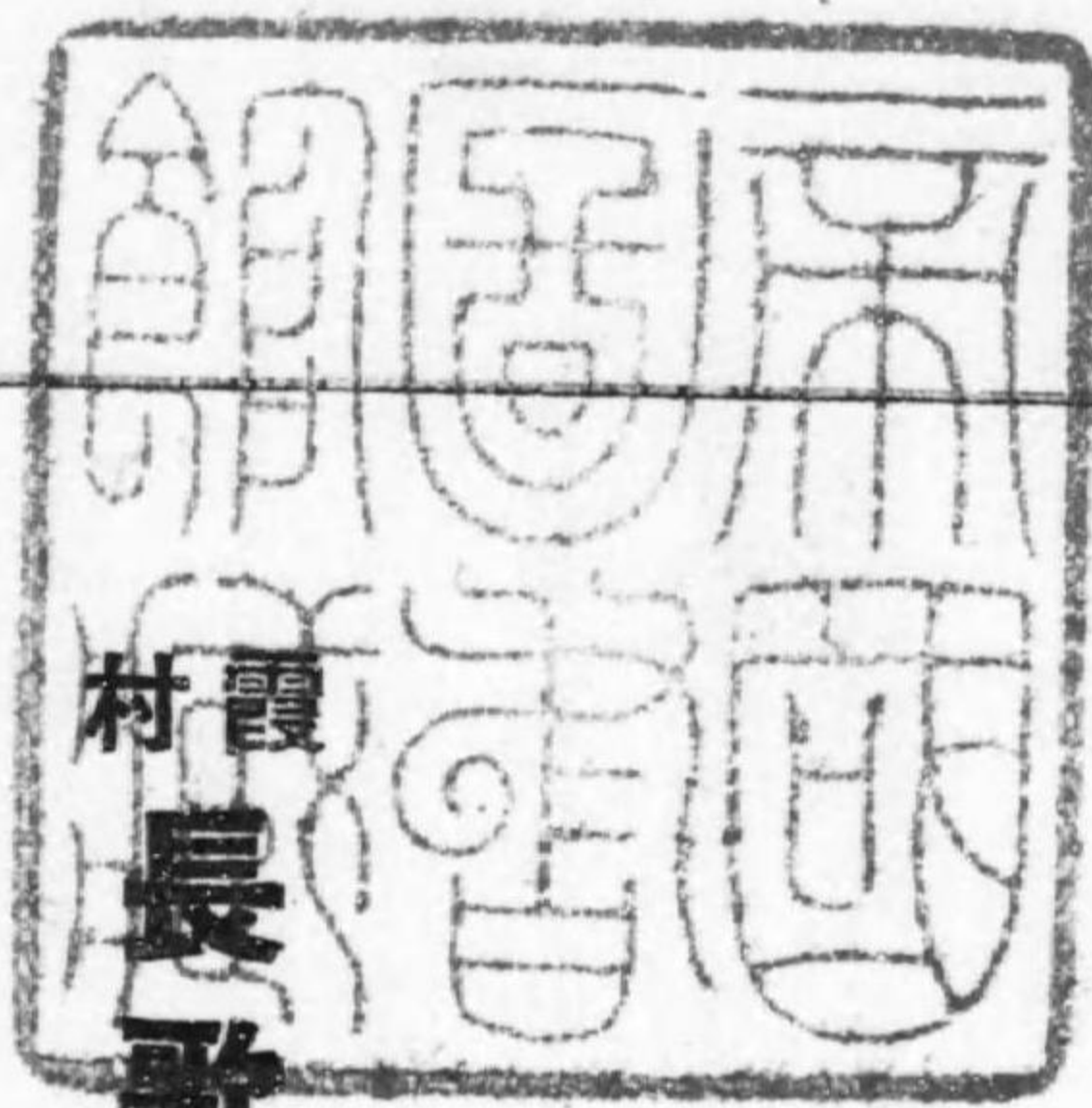
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





特214  
238



霞村  
長歌集及詩選

青山霞村





## 自序

詩歌は現代の活きた言葉で書かねばならぬ、チヨサーが英語詩人の父だからといつてチヨサー時代の英語で詩歌を作る人は英米國に一人もない。源氏物語が世界的な傑作だといつても現に源氏物語の言葉で書く小説家は一人もない。萬葉集が貴い古典でも萬葉古今の言葉で詩歌を作るは時代錯誤である。尤も表現の必要上現代口語法による口語詩歌に古語を復活させて用ひることは作家の自由である。時には古語が適切な場合もあり現代口語の方が適切な時もあり、その利害得失は差引いたら零とみればよい。これは文藝上からみた私の口語詩歌論である。併し國語論からみれば現在及將來の日本語は口語に統一せねばならない。國內への文化の普及と外國への日本語弘布とは現代の活きた口語でなければならぬ。それは散文は口語、詩歌は古語といふやうな例外があつてはいけない。總て日本語の文體を口語に統一せよ。これが私の口語詩歌論の基礎で、これには文學上の得失論などを容れる餘地がないのである。



この國語論によつて私は明治三十九年に口語歌集池塘集を出し四十三年口語詩集草山の詩を公にした。何れも口語でその形式は日本語に内在する短長、長短の反復律若くは波動律即ち五七調七五調のものである。然るに「草山の詩」を出した時には已に自由詩が起つてをつたので私はその不可を論じ詩集の序文で數言岩野泡鳴の説を駁しておいた。泡鳴の詩を作ると意識して作れば形は散文でもそれは詩だといふに對していくら詩を意識しても形が散文なら散文だといつたのである。圓形を意識して描いても楕圓になつたら楕圓だ、また内容さへ詩なら形は散文でも詩などいつては叙事詩と小説の區別がなくなる、テニスのイナツクアーデンやロングフェロウのエバンゼリン等の叙事詩とモウパサンやホーソンの詩的な短篇小説との差別がなくなる。散文の蘭亭記も詩と名づけられることになるといふのが私の詩學である、現今の自由律散文新短歌といふものもその論據は往年の自由詩と同一である。私は當時自由詩作家は詩の用語を口語にしたがこれを定形詩にするのが困難だからその研究などをせず一舉に面倒な詩形をも破壊するのだと思つたから口語でそれがなしえられることを實證するため大正元年に定形口語のオペラ、詩、歌詞、短歌等を

「面影」と題して公にした。併し世は自由詩時代になつてしまつた。

私は自由詩が日本特有の詩形を破壊したのは反對であるが、自由詩もその使命を果した。以前の新體詩では長篇になると單調に陥るから、新體詩と自由詩との中間で日本固有の反復律を失はない新詩形を起さねばならぬ、それには日本詩の基本律たる短歌の口語化の可能を普く知らせ、口語歌の普及によつて口語歌その物の成立と共に詩壇へも自然に働きかけて定形口語の新詩形創建の下地を作らねばならぬと思ひ、暫く作詩をやめ、大正八年口語歌宣傳の雜誌「からすき」を創刊した。併し私は口語歌と共に口語詩をも雑誌に掲載し、同時に私の經驗上。日本の總ての詩形の中で最も困難な長歌を口語で作し、以て定形口語詩歌の最後の關門突破を試みたのである。その頃手に入れた「文章世界」大正七年四月號で岩野泡鳴は「散文詩の實例的説明」で左の通言つてをる。

僕が相馬御風氏と同時に散文詩を世に初めて作り出した時には第一條件は詩を口語にすることであつた、がその當時はまだ口語に詩の嚴格な氣分が移りがたかつた。云ひ換れば口語を以て有形の律を追ふのでは嚴格な想が現はれかねた。そこで止むを得ず散文の形を取つたのであるから、その後



になつてこの形で雅語體の語法を用ひた三木露風氏の行き方は中途半端の不徹底であつて云々

相馬氏は何でも三四篇を發表したゞけでやめてしまつた、たゞ議論の上で詩は必ず散文詩でなければならぬやう主張したが僕はこの種の作を続けると同時に有形律の詩を全く否定したわけではなかつた。口語に詩の氣ぶんが移つて來れば口語的有形律があつてかまはないと考へてゐた云々

果して私の想像通りある作家の形式破壊は口語化のためで泡鳴の説でゞも新詩形の創建は已に豫定せられた觀がある。兎も角私は口語歌を宣傳してゐた。所が暫くすると口語歌人の中に自由律論者が起つて私の同志の人達で往年の自由詩の論據と同じ理論の所謂新短歌に轉向した人が少くないと同時に知名の自由詩人で新律格新詩形を唱る人が輩出した。人間萬事意外な方に運ばれてゆく運命の戲を今更の如くに不思議がつてをる次第である。

この長歌と詩とは大正八年以後の作で私はこれを以て、口語は歌にならないと古語の歌を作る人達と口語は歌の形式に適はないからと、用語は口語にしながら歌の形式を破壊する人達の理論に對し、口語でも歌になる、また歌の形式にも適應することを實證し得たと信じてをるのである。抑口語歌といつても短歌では「來ぬ」を「來た」とし「なり」を「だ」

とする位で口語應用の範圍が割合に狭いが長歌では範圍が廣く、口語の妙趣が遺憾なく發揮せられる、例令私の泉の歌の「眞つ晝間畔駈けてきて暮のよな兩手をばつき鼻ぬらし眉を濡して飽くまでも飲んだ揚句に汗だらけ埃だらけの片脚を突込んだりする」箕面の歌の「小さい手で袂に縋り且つ泣いて地團太ふんだ」など古語にない現代口語で、また口語短歌では使ふ機會のなかつた言葉である。故に長歌は口語を詩化するに好機會を與へる詩形である。また五七の萬葉調は莊重であるが七五の古今新古今調は動もすれば輕浮に陥り易く七七七五の都々乙調は最も卑俗である。それで口語長歌でも歩武整々と五七調が繰返される外の場合卑俗に聞えるやうな言葉でもそんな感じを消してしまふ。これも長歌詩形の長處である。長歌を作る困難は七五調に化け易いからで古語の長歌に枕詞や對句が用ひてあるのは一つは七五にならないやう措をとつたものと思はれる。

在來の詩形で今後も愛用せられるものは短歌と俳句と今様であらう。併し短歌でも形が餘りに小さく多量の内容を盛るに適しないから無理な聯作などが唱へられる。所が聯作は一首一首獨立の價值あらしめるには一首毎に驚とか若葉とかその題の言葉を用ひねばなら



す、聯作十首に十箇の同字を用ひる無理と不經濟をせねばならぬ。こんな時一首の長歌で完全にその内容が表現せられる場合が多い。新體詩が創始せられたのは小さい短歌の詩形の外に豊富な内容の盛れる詩形としてゝあつた。長歌は詩としてみれば五七調の新體詩である。従つて詩と歌との連鎖である。詩壇に新詩形創建運動が起り詩歌聯携論が唱へられる時詩歌並行論者であつた私のこの長歌によつて古語も口語も内在の波動律若くは反復律は同様であることの實證となつたら欣快の至である。今日でも定形詩は語法からいへば舊態依然古語詩である。

憶ふに曾て私が新體詩の形によつて興つて我新國詩に志しその基本律として和歌を元政庵の台巖和尚に學んだ時は青衿の一少年であつた。今鏡をみると鬢髮霜のやうである。噫藝術は長く人生は短い。新詩の基本律たる口語歌の普及に努力してゐる間に日が暮れてきた。後の事はこれを後賢にまたねばならぬ。

昭和十年三月

青 山 霞 村

目 次

長 歌 集

田 家 早 梅……………一  
 藤……………二  
 喜雨長歌並短歌……………三  
 寄 郭 公 戀……………四  
 ある社友の告白に酬ひる長歌並反歌……………五  
 續 春 遊 賦……………五  
 御影供をよんだ長歌並に短歌……………七  
 泉をよんだ長歌……………七  
 飯田白雨の歌集に題する長歌並短歌……………九  
 病床でよんだ長歌……………一〇

蒙 古 の 消 息

蒙古の消息……………二  
 母に侍して箕面に遊び歸るさ  
 よんだ長歌並反歌……………三  
 からぼりの下で……………三  
 祖母の墓でよんだ長歌……………四  
 しばらくは出る言葉もなかりけり思ひがけなく  
 君に訪はれてと歌書いてきたあさ子の消息をよ  
 みこの長歌と短歌を作る……………五  
 勅題曉山雲 獨白體……………六  
 り ん ご……………七  
 密柑を咏する長歌……………八  
 芭蕉堂藍水宗匠を訪ふ……………九



酸 莖	.....	一九
ドイツを悲しむ歌	.....	二〇
あ る 時	.....	二一
またある時	.....	二二
茶を摘む頃	.....	二三
返 歌	.....	二四
公園でよんだ長歌並短歌	.....	二五
北 陸 遊 草	.....	二六
蘆原温泉	.....	二七
山中温泉	.....	二八
永 平 寺	.....	二九
おもいで	.....	三〇
面 影	.....	三一
貧 骨 相	.....	三二

實 印	.....	一九
東京の大震災をよんだ長歌	.....	二〇
二つの不思議	.....	二一
新年志を言ふ長歌と短歌	.....	二二
大阪の北濱でよんだ長歌	.....	二三
歳 暮 市	.....	二四
お多福によせる長歌	.....	二五
三越の七階の頂でよんだ長歌と反歌	.....	二六
浅ら井の歌	.....	二七
野 景	.....	二八
犬	.....	二九
有島武郎の心中を読んで作った長歌と短歌	.....	三〇
ぎいすをよんだ長歌	.....	三一

ある易者の歌うた長歌	.....	四三
蓮月尼の五十回忌に	.....	四四
星を仰いで獨語する長歌並に反歌	.....	四五
草引男を詠んだ長歌と短歌	.....	四六
母を葬つたまたあくる日元政上人の集をよんで作った長歌と短歌	.....	四七
蘭	.....	四八
老女と念佛	.....	四九
北海道から来た手紙をよんで	.....	五〇
座古愛子から微光を贈られた時	.....	五一
白百合を傷む	.....	五二
裸 童 子	.....	五三
夕 の 聲 二首	.....	五四
石地藏の長歌とみじか歌	.....	五五

バ ナ	.....	五七
夢の日記	.....	五八
古 鐘	.....	五九
百 合	.....	六〇
寂山のケーブルカーにのる長歌と短歌	.....	六一
鐵管の泉	.....	六二
上州をおもふ長歌並短歌	.....	六三
盆 石	.....	六四
掛 軸	.....	六五
瓶 梅	.....	六六
岩井信實を悼む長歌	.....	六七
兄の次男の入營を送る歌	.....	六八
勅題山色新を詠する長歌並短歌	.....	六九



幹槍太の歌集に題する長歌並反歌	六
兒狗を養ふ歌	六
伊勢音頭	六
軍旗祭をみに行つて	六
六波羅かむろ	六
上田征路が歸國を送る長歌と反歌	六
上田穆の歌集に題する長歌並反歌	七
無花果の木を惜む長歌と反歌	七
歌の響	七
こし水	七
もらひ風呂	七
古道の家	七
簡易保険	七

牛乳	六
運命の歌	六
ことあげせぬ國	六
宗且狐の祠をよんだ長歌	六
藤森祭	六
勅題曉鷄聲	六
夏の不順をよんだ歌	六
碧梧桐	六
古句を集めて菊花をよむ	六
鐵亞鈴	六
奥村鶴翁から竹印を贈られて	七
鞍馬の裏山を下りて	七
國際聯盟	八

三人の勞働者	六
發作	六
額ぶち	六
初夏	六
暑夕偶語	六
骨董市	六
東山公園で	六
ラヂオ	六
春	六
清水寺	六
學生角力をみる	六
皇太子殿下の御誕生を祝ひ奉る長歌並反歌	七
大和民族	六

祖先崇拜	九
やはり深草	九
人種平等、ある基督教徒へ	一〇
殺生戒	一〇
眞言宗の企をきいて	一〇
九月十八日	一〇
鳥邊山	一〇
五條	一〇
菊	一〇
駒風	一〇
羊牧者に寄せる	一〇



詩選

新曲あま……………107  
 新曲しらいと……………108  
 戀と愛……………108  
 霞ヶ谷……………110  
 面の影……………110  
 椋の木の……………111  
 石地の蔵……………111  
 瓦屋……………113  
 七つ橋……………113  
 生れた家……………114  
 儒者の夢……………115  
 得意……………116  
 村とまち……………117

善い資本家と善い労働者……………113  
 私産と共産……………115  
 大地震の前後……………119  
 春寒……………121  
 六道詣……………123  
 初秋……………124  
 洛外小景……………125  
 反古……………126  
 自覚……………129  
 新曲うらぎり……………129  
 虫の世界……………140  
 野球俳諧詩……………143  
 時計……………143

星……………143  
 春……………143  
 平和の圖……………144  
 鮮……………144  
 難波の南海食堂で……………146  
 にかい顔……………147  
 基督像……………148  
 弱者……………150  
 箇人……………151  
 新涼……………153  
 水郷……………153  
 炭園……………154  
 親子……………156

みことば……………157  
 甥策馬が満洲獨立守備隊へ赴任した時……………158  
 老樹の賛……………159  
 エレベーター……………161  
 戀と愛……………163  
 大噴火……………163  
 ラーネッド博士夫妻の歸國を送る詞……………164  
 閑庭花を看る……………164  
 薄暑……………164  
 春末夏初……………164  
 同……………169  
 避暑……………170  
 五月……………171



涅槃か永生か	.....	一七二
星	.....	一七三
同	.....	一七三
アヘンの宗教	.....	一七三
百貨	店俳諧詩	.....
同	.....	一七四
謎	の 愁 エロ三首の一	.....
大きな手	.....	一七五
再	會	.....
雨	風の日	.....
初	冬	.....
壁	一重	.....
飲	食	.....

四	月	.....	一七九
計	.....	.....	一七九
唐詩選書本	.....	.....	一八〇
小	生活	.....	一八一
<b>附 録</b>			
漢	詩	.....	一八三
和	歌	.....	一八九

## 長 歌 集

### 田 家 早 梅

大正九年正月勅題

いでゆわく紀路はあたゝか。暖かなうしほが岸をうち洗ふ南の國は雪積  
る冬しらぬくに。山國の寒さをさけて冬籠すまふかりやは垣根にも薺嫁  
菜が青やかに土を染めてる。ひるすぎのそゞろあるきに山里を尋ねてく  
るとそこゝに梅もさきでゝ山水の根をあらひゆく細竹の竹の林にひと  
ふた木枝をば交へ匂をば水に浸せば麥の芽のすこしのびたる家と家のあ  
ひだの畑に下枝のみ白いのもある。大雪でまちも巷も三越路は埋もれて  
よに天地の脈うつ春を幹に枝にすでに傳へてこの里は梅が綻び風かをる  
木の下陰に白毛やら笹毛などした鶏さへも日影を浴びて歡びを鳴きかは



すのだ。目をあげて遙かにみるとしほ烟る波のあひだに仙人せんじんの老ぬ葉がある。とゆた蓬萊さんもうす碧く横はるよな。はてしらぬ海こえてきて秦しんびとの徐福がたてたいにしへの新し村の絶えはてた跡はどこだろ。うら若い童男童女がまいといた實ばへの苗の幾代々の裔うらの若木か清らかな書齋の前に古幹がうとろになつて二三輪花を着けてるこんな老木も。

寒のうちに梅もにほふか理想郷ユトピア徐福がたてた南の國は。

### 藤

うえてある一二株の白藤がことしまたさき白玉の頸飾をばみづみづし若葉のあひに垂れかけて垣にも纏つれゆく春の風に揺れてる。いち二年うちすてたつたあれ園をかうして飾るその花を美しともひ横のはのあいた土へは薯をうえ瓜を移そと黒鐵の鉄ふりあげて草けづり土耕すところやどうだ藤の蔓めがたつよこに地に這みからみ根をおろし根から芽をふき

中々に鉄をいれない。鎌でよもまづこの蛇を斬らなけりやおれの仕事はいつ寸も進まないんだ。いつの昔藤の花など世の中にうるははじめてか美しと人はほめてる。すてよおきや強い力で痔畑を縛つてしまふはこんな藤だぞ。

藤蔓をはやく理めよさうでなきや薯が食えない瓜がとれない。

### 喜雨長歌並短歌

茶摘歌山邊にきこえ家々の軒に焙爐の香をたて、二十日あまりか。葭簾かけた母家へ大和から蚊帳をば賣りにあきうどが昨日は來たと。それになぜ雨が降らぬか徒らに夏めくちまた日に焼けて渴いたはたけ花落ちの小さい胡瓜も中々に太らぬさうな紫のなすびの苗は葉も莖も焦げるぢやないか。麥刈つて早苗挿す日に引入れる水はどうする雨が降れ雨がふれよとわれ人の思てる矢先きゆふべ降り今日またふつた。潤れてきたるど



も釣瓶があすからは届くであらう打水も心のまゝだそのうちに菖蒲を浸す五月雨になるであらうと嬉しさに裏戸を出ると柿の花ちる隣では古女房鉢桶あらふこの夕晴に。

水切れの圍みは解けた女達あまよろこびの粽でも巻け。

### 寄郭公戀

郭公なぜに鳴かぬかわが思ふ人はなぜ來ぬ麥刈つて夏がきたのにあやめふきさつき來たのに藤波の花咲き纏ふ筒井筒肩をならべてかんがみた清い姿は夢とさりうつゝに消えて春はもうなゝたび暮れた隣同士ひとはいたけどまたくると庭の松の葉はのかにも洩れるそのこゑふとみると降る五月雨にたゞ匂ふくちなしの花ものいはぬそのつらささへ忘られて嬉しとおもひ五月來りや麥の穂立の風に鳴るおとにもしのび家ごとにも菖蒲かりふく祭日を持つてゐたのに子規なぜにきなかぬわが思ふ人はなぜこぬ

その古里へ

### ある社友の告白に酬る長歌並反歌

菜の花に蝶は戯れたはむれて暮れるも知らぬ。そのやうなをとこ女のうら若い生の歡。ルーソウとオーゴスチンの懺悔記は何の懺悔か。過と罪は却て玉光る徳を生むのだ。きく君は醜い石を切り割つて泉を得たと。その清い泉をひいて絶えずく甕に湛へよ君がくりやの。

色界の妙悟といほかきみはいふ愛の根のない慾に飽きたと。

### 續春遊賦

(前略) 於者伴五六僧兮、陟霞谷之丘、携二三童兮、浴鳴瀧之流、

浩如密如兮、逍遙徜徉兮不覺春往爲夏兮、又爲春爲冬爲秋。元政上人

松くぬぎしゝに生へたる林には蘭さきしなび若芦の水を抽き出た水際に



六  
は藤咲きかゝる。水満ちて藍を湛へた函谷の池の静けさ。春深い山田の  
どこか蛙鳴く聲がきこえる。この池の源である溪川を沿うてのぼると一  
歩いつば春のあゝとや。筍はむかひの崖にまだ咲かぬ卯つ木に交りぜん  
まいはこちらの岸にむら立つてのしをかいてゐる。たけかけた蕨の細い  
絹網の葉の柔かき。よしはらに透けてみえるはくれなるの斑を蒔繪した  
みすくし虎杖の莖。水を飛び水を渡つて松山の麓へくると岩が根に岩  
梨の實がうすあをの珠をは聯ねむらさきの躑躅の花もにほひで、巖を染  
めてる。飛石が動く足の下ゆくは谷の赤蟹。人を見て小石を蹴立て山  
深く隠れさるのは山鳥か錦の雉か。陰暗い木々の若葉とせまりゆくその  
みづすちに行きなやみ溪をあがるとこゝにでも短冊のよな細い田が段々  
にある。水上は清い鳴瀧花に傍ひ泉に臨み元政がそこで書かれた春遊の  
賦さへかすかにわが耳に傳へくるよなその瀧の音が。

### 御影供をよんだ長歌並に短歌

法力からだのちからみち満ちた大師の像をおんなたち拜んではさる堂  
の前の人のむらがり。とび色で脚が短く尾の長い馳のやうな三枚の馬の  
繪仰ぎ指太い男やちぐら口々に占うらをたてゝる。いや頸が今年は細い去年  
より尾はましなよな早稲がどう晩稲はどうと。散つてゐる花と若葉と杉  
の木の森に聳えるあらゝぎの九輪に照る日。菜の花に圍れてゐる島原は  
太夫がくるわいま練るである。

花ちる日御影供につどひ泥鉢に植ゑる蓮の根買ふ人もある。

### 泉をよんだ長歌

霞ヶ谷の山地が西に盡きて深草の野になるその境から百間  
ばかり西に小さい泉がある。人は弘法井戸とよんでをる。

吾母の圓い鏡を夏草の間に投げた大ききがあるかないかの深草の野中の



清水。苔青い石の縁から溢れ出で流れてゐる。噫清水おまへは今もこのおれを覚えてゐるか。熱い日が山に沈んで野も空も青いたそがれあかゞねの薬罐をさげてくちなはめ出なよろに鎌十挺もつてゐるぞと聲高く呪文を唱へ草深い小徑たどつてこゝにおり膝を屈めてまづ蓋で清水を啜りそのつぎは薬罐で掬ひすぐ流しまたも酌みあげ幾度か流してはくみ來た路を家へ歸つて納涼みゐる父に捧げた小さい兒を覚えてゐるか。その亡んだ父に似てると人のいふ顔を寫して井戸もまた驚いてるかその頃と今のかはりに。懐しい野中の清水ひよつとしてものがいえたらどんなこと俺にいふだろ。田の草をとる里人の渴きをば濡ほすため湧てゐる井戸であるから美しいリベカがひくれ甕抱てくるのはよいが眞つ晝間あぜ駈けてきて墓のよな兩手をばつき眉ぬらし鼻をぬらして飽くまでも飲んだあげくに汗だらけ埃だらけの片脚を突込んだりする無茶者があなたのためとも折々にあつてこまると顔しかめ告げるであるか。けど清水噫わ

が井戸よ瓦焼く煙が谷に幾條もたち初めてから俺のよに若い望をさかさまに悲しさだめで酬はれたものがゐるたかいこの里にただ一人でも。湧きかへるおまへを酌んで耕しに老いよとはせずまぼろしの影追ひ歩き身は傷み心疲れて故郷のその懐に泣きながら眠りたいためむく犬の徨ひ歸り清らかなおまへの前に衰へた姿をうつすそんな兒は曾てゐるたかい噫ひとりでも。

### 飯田白雨の歌集に題する

#### 長歌並に短歌

武藏野のむかふにみえるまゆづみのあをい筑波根。その峰を朝夕ながめ沼の邊に田を作りゐる年若い飯田の君は田ばかりか歌さへ作る。田ばかりを作つてゐては天地のいのちがみえずうたばかり作つてゐては人間の汗がわからぬ。野に立つて強く働き家にゐて深く思ふがねうちあるくら



しでないか。言ふことは心のまゝにする手足たれ縛れない青玉のさち帯  
 びる身が梅紅い縁で機織る若草の妻を迎へて新室で八雲歌つたよろこび  
 を書いて編んだと鳥が啼くあづまのたより。よし君よこれから後も雨に  
 読み晴に耕し春の水苗代にひき秋風に足穂の稻を利鎌もて刈り取る時も  
 男鹿鳴くからうたうたひまらうどと樂む日にも夫唱へ婦が随ひ園の柿ち  
 ぎりくらせよとも白髪まで。

常陸野に耕やす人のちからある歌をはおもふ筆を投じて。

### 病床で詠んだ長歌

この春も無事にすぎたと春盡の記を書いたのに何のことふるい病は卯月  
 ふる藪のやうになよ竹の身にせまるとは。あけ近くつかさの庭で鶏をき  
 いたベテロの愕きと悔と嘆きに似通うた心のおびえ。ひと夜ねてさめて  
 のあさも桶釣瓶井水も酌ます床の上で白粥すすり歩けない身を思うては

若芽ふく無花果の木に鳴きないて巢をば營む小雀の自由を羨む。病なに  
 わがからだなに。みなかりの物ではないか。裂けるのは布あればこそ。  
 たましひの幕屋が破れ倒れたら野をさるまでとめつぶつて観じてみても  
 眼開くと麥は縁にすすしろの花は薄白。世はまさに夏になつてゐる。維摩  
 詰このしつにきて吾病ないがしろにする大智慧を授けくれたら藤の花長  
 いこの日も山へいて蕨でも折り暮らそとおもふに。

### 蒙古の消息

蒙古から手紙がついた。五百日砂と氷と寂寞の中に住つた吾甥の歌がま  
 た來た。朔北は春といつても草や木が芽を出すばかり。馬に乗り日曜日  
 には街近い河へ行つたと。耳に聴き目に観るものもその街にないのであ  
 らう。行く時は少年だった。草がもう黄に枯れてゐた。歸る日はどうな  
 つてをろ。巴且杏の花の盛か。噫男兒足ひとあしも故郷を出ないでをつ



て魂がなに鍛えよぞ。ことさへぐ人に接して人間の平等を知り砂原に照る月をみて深く思へ家と國との愛すべきこと。

母に侍して箕面に遊び歸るさ

よんだ長歌並に反歌

年とつた母にかしづきくれなるの紅葉をふんで箕面山いはほ落ちくる大瀑をあくまで眺め茶を啜りひるげをもたべまた溪をあひいたはつておりてきた麓の小街土産店軒を並べてかへで葉のあぶらあげうる。そのかたの煎餅賣つてる。裏山のはたけになつた枝なりの柿も吊つたる。店の前母がとまれば影のやう兒もとまるのか。小さい手で袂にすがりかつ泣いて地團駄踏んだ遠い日をけふくり返したきのまち母と柿買ひ栗密柑かふ。

むら紅葉みのおの山をおりてきて母は栗たべわれ密柑吸ふ。

からぼりの下で

紅葉てる庵寺尋ね 歸りしな疲れてやすむ 伏見山竹生へ茂る 空濠のその山陰に 横臥しに下に藉いてる 草はもう大方枯れて 褪げのころくれなるの蓼 緑青のちいさい根笹 その上に散らばつてゐる 櫛葉の黄朽落葉も 暮近い秋の光を てりかへすいきほひもない わが足に觸はるしろ砂 吾肘にあたる石ころ それはみな山の出水に 流されてこんな林に 落ちこんできたものである その石をなに心なく とりあげておもひに耽る 芥子坊主のこどもの時よ 草も木も石も瓦も 貨幣よりうれしかつた日 頑くなゝこんな石でも 旗じるし日に映る城 波荒れる海の大島 熊のすむ飛驒の群山 さゝやかな笹の一片も しやこ珊瑚積み歸りくる 大船とひそかにみなし 木の箱に秘藏したのに 今はもうそのまぼろしも 歡びもなくなつたのだ わが慾はどんな物にも



かへられる紙と黄金と その紙と黄金にかはる しろものにみだされて  
 ゐる 化石したじぶんの心 かれかけてゐるわがからだ かう思ひ眼を  
 轉じると 何人がすてゝいつたか 黄疽の色してる柿 黄玉の光もさゝ  
 す まざまざとみえるはやはり もし食たら舌の癒れる澁柿である

### 祖母の墓でよんだ長歌

詣できて立ちさり難く亡き祖父の兄檢校の墓石にもたれかかつて悲と思  
 に耽る。賢貞とそして慈愛の玉のよな完いひとはとことにはに目覺めない  
 のか。悲しわが四十餘年の歡びも悲み望み思出のすべてが今は石のやう  
 なつてしまつた。懐に泣いた時から初霜が髪におくまでなつかしい年も  
 月日も生きたまゝあひ連つて衰へてをつたとはいへ生きてゐた老のゑま  
 ひに一つ宛光つてたのに寒一夜油の盡きた燈火の消えはててから越えら  
 れぬあやし切目がこし方と今とを限り來し方がじぶんのものでないやう

になつたのである。共にきて水と橋をあげたのは夢であつたか。思出も  
 生命を失ひ墓のみがのこるのだから。笑みなくて何を怙なまう。我を撫で  
 我を育てた愛なくて何を恃まう。若し呼んできこえるならば聲かぎり叫  
 びもしよが若し抱いて通じるならば墓標抱いて泣かうが冷かなこの墓土  
 や冷かな松や櫻や。誰にでも解つてをつて誰にでもやはり解らぬ恨をば  
 しばし來て泣く土を隔てて。

しばらくは出る言葉もなかりけり  
 おもひがけなく君に訪はれてご歌  
 書いてきたあさ子の消息をよみこ  
 の長歌ご短歌を作る

大隱は市に隠れる。われはまた薬をかひに本買ひにいちへ出てゆく。そ  
 れでないなにをめあてに紅葉する谷を忘れてこの日また君尋ねたか。九



つの希臘の神の内陣へ心ばかりの燈をさへげたいため。とこみるとむかし吾等がからうたの韻圖ひいたその庵のあるじの手跡。その下に淨い黄菊が露霜の夢もみないでやすらかにさきにほてゐる。石に鳴る車の響戸を叩く客人もなく語りあふ二人の聲の空山でおち葉きくよな静かさとして寂しき。せゝらぎのたえぬ話にいくたびかためらひながら街まちで繪葉書嫉み賣られてる琴を憐み暮れるころ家に歸るとあくる日のそのまたのひにすがすがし歌かきそへてこのふみがきた。

寒山か拾得の侶とあやしんでしばし言葉の出なんだきみか。

### 勅題 曉山雲 獨白體

「松たてた竈の前で四五人が焚火にあたりふけるまで掛取にいた親方のかへりまちわびやうやくにもらつた金でかゝやこの晴着うけだしあつてそばともに啜つて寺々の鐘きゝながらひとねいりしたとおもふと別荘の

鶏の初聲。まあこれでおれもめでたい。平らかな相摸の海はほのぼのとしらみはじめた。白雲は浮彫のやう玉篋箱根の山のふところにたなびいてゐる。あすこには村もあるんだ。贅澤なやどももあるんだ。幾人が絹の蒲團であのうらにいまねてやがる。箕をば流れてはいる石室の湯からあがつて三椀の雑煮かへてるやつもをるだろ」

### りんこ

冬がきて林檎がやすい。一枚の銀貨なげると名工がひねつて焼いた陶物とおもはれるのが三つも四つも掌へくる。王公の卓にのぼれば職人のボケツトにでもねぢこむになに造作ない。さくいこと白雪のやうその淡いあまさは蜜をなめるよりはるかにまさる。人間の先祖が食つた智慧の實がこれであつても小刀で堅四つに割り皮をむき青白い肉嚙むことがやめられやうか。仙人がすむしんざんもしこれがみつけれたら桃などの



花は咲くまい。冬がきて貧富いづれの唇もうるほすのはわが寒い厨に  
光るこの赤りんご。

### 密柑を詠ずる長歌

霜の朝大津へ通ふ牛追の知つた翁が牛の脊の依をさいてまだ青い柑子三  
つ四つわが紺の胸前垂に入れてくれた遠い昔がつくづくと思出される。  
篝火の影にちらほら花がちる祇園のゆふべ歸りしに暗いみちみち酸ン  
盡きて腐りかけてるそれを噛み渴きとめたはどのへんの街であつたか。  
海越えて日本へ還る出稼の荷物のほかのひとと籃はとものはなむけ。乗合  
のその若者がかこのまゝじぶんにくれた常春のキャリフォルニアのアレ  
ンヂのほひと汗をわが舌はいまも忘れぬ。月戀にうべ山風に大内のよ  
るはふけゆき汗ばんだ典侍が内侍が細指で冷たいそれを劈いてゐる繪は  
しらないが鏡餅もちにのせたる紀の國の密柑みてるとまぼろしか夢かう

つゝかあばらやの杉の柱もことごとく詩の草花が刻まれてゐる。

### 芭蕉堂藍水宗匠を訪ふ。

#### 逢はないで歸る途すがら

花陰にうごめく人と車とをしばらく避けて君を訪ふ双林寺の居。句をい  
れる囊はみえず座敷には桃さしはさむ天々の三つの人影。堂ふりて龜ほ  
の暗く碑さびて銘がよめない。竹青いうしろの林花白い隣のいほり。人  
はなに嫉み争ふ東山この寂光の境もあるに。

### 酸 莖

甲子に買うて歸つた北山の蕪菁のすぐき。わが膳に鯛はないけどわが碗  
にふぐはみないが幸に麥飯でない白飯のゆふげのさいに輪にきつてその  
酢莖くふかぶらのすぐき。



北山の雪を被つて生ひたつたすぐきはうまい根でもはあでも。

二〇

### 獨逸を悲しむ歌

基督が凡てつるぎをとる者は劍をもつて亡びると二千年前じぶんをば救はうとする弟子の手を抑へていつた莊嚴なその一言が夏の日の光のやうにまざまざと世にみせられた。とゞせまへべんとつるぎで王と覇を兼ねてたやうな日耳曼は今どこにある。傲慢な學者と民がカントをば十字架にかけ金の牛のニイチエ拜んだ罪惡の悲しいむくひ。ひゞさがるかねの價に頼めない明日を嘲り民衆は酒に女にうた舞に夜たゞ耽ると。そのみか恥を忘れて物學ぶ少年の兒が黃疸の黃な禍とさけすみの入墨された蠻人に錢を乞ふとは。乳なうて幼兒は死に肉なうて親は病みふす。藏書うるしらがの教授操うる紅顔の處女。慘ましいこのくにたみをいかにして誰が救ふか。畏ろしい凡てつるぎをとる者は劍をもつて亡びるのその

ひと言がまのあたりいかづちのやう神を棄てた獨逸の上に落ちたのである。

### あゝある時

花がちる若葉がもえる。莖たけて葉をばのばした柔かい草はあだかも王侯の袴ひざねのやうな。わが家は街の裏だが兒雀が軒の巢になき魚がむれて流をのぼる。色糴子の帯してる子と黒い帽きた若者がくれ遅い西日に向ひどての上で坐つて語る。折柄に野を越えてきて村人が笛くれた。名山を訪えないからだ美食にはあけぬ身だけど何となくじぶんは嬉しかうやつてあかるい室から初夏のゆたかな姿みつめてゐると。

若葉もえ軒に雀の雛が鳴き自然の愛のさはある家。

### またある時

一塊の土は陶師のてだくみに碎かれねられとやみない轆轤の上でさまざ



まに形づくられ軒先で日に乾かされいろいろの薬をぬられおなじ土の窯で焼かれて美しい花瓶になる。美しい瓶にはなるがその儘で土であるのとつちの身にはありあるまい。進化などその一塊の土ぢやなかるか。

あるときは解脱をおもひそと歎く轆轤のうへの天地とわれを。

### 茶を摘む頃

若葉の木淡く陰さす山城の木幡の道を禪師の跡尋ねてゆくとはの／＼と焙爐のにはひ洩れてくる街のそこ、細竹で板戸支えた長窓のまどのうちらに眞裸のはだかが並び汗の手で蒸葉揉んでる。色黒のすね長男優し名が腕に彫つたるひげ青い男らはまた緑の茶もみあげてゐる。裏のほで松割木焚き大釜に湯氣のたつのは生葉むすその蒸場らし。幾軒かこんな家過ぎ片側の處へくるとすゞなりに青梅のなる梅の木の下茶を揉むの末遠く霞簀をかけたおひしたにちらほらみえる卯花の白い手拭。やゝ暑い

午後の疲れに關も取る子のある後家が昔摘んだ戀の古葉や男帯ゆふべくけてた少女子のみそか事まで無雑作に芽籠の前にぶちあけて興じた後か茶摘歌艶なしらべに寂びはてた聲が交つてそよとふく山風のやう幽かにも断えては續くゑんのむかふで。

黄檗の寺をたづねてかちでゆく茶の香漲る初夏の道。

### 返歌

隣の高木教授から贈られた墨に「クラシカルな奈良で貰ふた古梅園の墨のかをりにみ友をしのぶ」と歌が添えてあつたから。

古歌や古い佛や、夏草にねてゐる鹿や、そんなこと思うと銘をみてゐても、心潜かに詩と繪との廊下をあるく。青丹よし奈良の都のふる家のしにせの店でおてゐたこれわじぶんの短夜の夢を寫すにふさわしい墨。

鹿のこゑ八重のさくらの姿でもすりだせそうなの墨のつや。



## 公園で詠んだ長歌並に反歌

そのよこは宗右衛門町そのまへは堺筋通。三角で十坪ばかりの公園も名にはそむかすいくらかの木が若葉して夏の日と塵を遮る。ひるめしを二時過ぎにくひ疲れた目だるいからだで長椅子にもたれてみると日のうちはその横のほにだめいた姿もみえず前のほは電車の響まうけるにけんめいで歩く人達のあしなみばかり。群を出て木の陰へきた薄つべらな麥藁ぼうしが水道の栓をばねちてしたたかに水を飲んでる。風呂敷の包をさげたゴム靴が館パン食てる。生きるため利をえるための家と家壁と壁とが押しあつて衝きあつてゐる大阪の街の小脇に残された扇面ほどが商品とさつと銀貨と欲望で渦巻いてゐる砂熱い沙漠の中の緑地である。

錢いらぬ椅子にこしかけ錢いらぬ清水をすすする富の都で。

## 北陸遊草 五首

## 蘆原温泉で

大正十二年夏母に侍して加越地方に遊んだ時の長歌

清らかな温泉の湯が湯壺から溢れあふれて敷いてある白い瓦の繪模様の上を流れる湯の宿の湯からあがつて臥しながらめつむりゐると遊び女が客によばれて湯治場の鄙歌うたふ高い強いアルトの聲よ。彼等にも愁があるか。多愁の身多病のからだ傷ついたけものを學び愁心をあらひそ、がう病骨を蘇らそと途遠い越のいでゆにあこがれてきたのではない。生年は百にも満たぬ。老萊の舞もいくとしけふの日の歡びやがて明日のひの涙でないか。晴れしだい老を扶けて山遠く溪水碧い沼廣て小舟あやつる湯の町のくらしみてこうあかれこの雨。

## 山中温泉

風呂場三つそれをめぐつて湯の宿がひさしをつらねその上手しもてには



また銀行や検査會社、雜貨店呉服屋菓子屋せともの屋ぬりもの屋などそれぞれに店をならべて細長い街をなしてゐる。手拭をひろたと歌ふ山陰の桂清水はやど宿の飲み水やそな。一筋の湯の手拭に染められた戀は幾夏染め返しかへされてゐるか。芭蕉の跡尋ねてみると、賤の女はわからぬ顔で蓮如さんのことを答へる。水碧く巖をめぐる溪川に危く架けた蟋蟀の橋にも何か一篇の詩がありさうなその橋の名に。

### 永平寺

唯一心よく現出す幻でない大伽藍。山門は木のまにかゝり廻廊は雲を帯びてゐる。みづみづしほとけのすがたうつくしや欄間にいきたほりものゝ人獸草木。清らかな泉は石の鉢にあふれ厨にそゞぎ浴室に流れてはいる。溪川は電氣を驅つて堂塔に法の燈火朝も夜も掲げるといふ。經をよんで時に偈を吐き薪をとりわらびをたをる。ねむりの魔禪を侵かすと警策は落花に響き一山が勤行の時鐘の音は紅葉をもれる。三代の禮樂もこれに

すぎまいと儒さへたゝへた嚴かな則やくらしや。肉食の頭陀はしるまい志比の谷むかし隠れた一浮屠が却て人天の師であることを。

### おもいで

恨我尋芳已太遲。昔年曾見未開時。

如今風擺花狼藉。綠葉成陰子滿枝。杜枚

陰深い竹の林の西べらにわがすんでゐた六疊のはなれがあつた。庭にわく泉わまちに流れでゝ小河になつてた。一卷の聖書と四書（註。薄葉の四書正文）と二三部の詩や歌の本。嵯峨日記の芭蕉のような淡泊なくらしであつた。おもやにわ娘がをつた。美しいはたちのをとめ。いつた時をつたのでない。いつてからせんせの世話にはゝ親がよんできたのだ、海深いみなとまちから。初秋のあさおきるなりめしをたくうしろすれく板の間の厨からすぐとびこんで泉をあびた。清らかな涼しい泉、清らかなつゝましをとめ。いまみても杜枚之がした緑葉のなげきわないがつゆ



近いまの家の梅の實が枝をたわめてうむ時である。

女房達わかい聖とわれをみた町かへりみる夕日の中で。

## 面影

二三年前加賀の人谷口夢草から「面影」を金澤の本屋で發見して買うたというてきたことがある。あれわ口語の歌劇舞曲長詩短歌を集めたじぶんの第三の詩集で大正元年に出したのであるから多分殘本か古本かがまだ金澤にあつたものとみえる。今年の五月末加越地方に遊び金澤へもいつたが歸つてからその事を思出してこの長歌と短歌とを作る

二十年針の尖りの一點をみつめてをて何物がむくいられたか。嘲と冷い笑兩鬢の愁の白さ。二十年針のとがりの一點をみつめてるよなしれものわ世にすくなかる。まだ墨のかわかぬうちに花のよな宮女の喉にのせられた詩もあつたのに都から流人となつて北國の本屋の隅でちりひちにまみれてをつた吾集の紙衣の姿。けれどまあ話したる竹槍と鎌をふるつてさむらひの太刀と鐵砲にてむかえる律義な人にたまとぎもみな石

とみた楚人の玉の。

白山の雪もかますに金澤のまちで十年泣いてたわが兒。

## 貧骨相

おすつさんと女がよんだけふはこの長者維摩を。洋服の姿をみたら稅務署とこわがるやろし、袴をばはいていつたら八雲たつ出雲の國の大社のお札賣りかとけん愒な顔をするやろ。とにかくに卑耶離の城の長者とはたれにもみえぬ貧骨相や。

## 實印

曾祖父の名乗のほつた「幸延」の黒い印形。父母が幼い時にじぶんにしてくれたからたいせつに今も持つてる。貯金をばだすときおすと大き字がけいを喰みでる。袖にして銀行へゆくとダブルカラが笑をかんで黒



肉がないのでといふ。ひとよりの役場ではまたみる人が嘲けるやうに精巧なほりをたへる。朱の印は武士の指の血、黒印は町人のまげ。それほどに思はれたるに印なんか何でもよいと曾祖父の遺物そのまゝどこへでも太鼓のやうな判を押してゐる。

### 東京の大震災をよんだ長歌

あすありとをもふ心の山櫻よはの嵐のふかぬものは 親鸞  
しみくひ錆びくさり盗穿ちて竊ざる所の天に財を蓄ふべし 耶蘇

生きる爲めいきる爲にと叫んでたその民衆に死ぬために生きてゐるちふ平凡な眞理をみよと眞つ晝間じしんと火事はバビロンを全滅させた。長明の悲觀をしらぬ論客に方丈記をば九倍した記をみせつけた。金に酔ひ白粉にゑひ憎しみとねたみにみちてしんらんを嘲り笑ひ基督をひにくつてゐた髪長い近代人よ、こんどこそ夜半の嵐のしみくひの偈が解つたら。あまりにも生に執着する者は生を奪はれ死にさへも戯れてゐるともがら

は死が忌み嫌ふ。すみきつた悲觀の底の盤石を金剛不壞の樂觀の礎としてたまひしの宮居をたてよ。世をあげて忘れてをつた肉をのみ思ふはほろびであるちふことを。

天はいきた記をつきつけた方丈記味ひえない近代人に。

### 一二つの不思議

われをみて段々父に似てくると人がみなゆう。われもまた髮刈ることにすがたみをみて不思議がるおさなごころ丸かつたのにその顔が長くなつたと。ことさえぐ西洋的に若い時訓練されたわが心じぶんの思想ちかごろでよくしらべるといつのまか東洋的なその生地があらわれてゐる。生れ出た故郷へ還るわが顔と心の不思議。接木した枝垂の梅のくれなるの枝が衰へねもとから白い野梅の芽が吹いてゐる。



## 新年志を言ふ短歌と長歌

幼頃いつも遊びに小松ひき蘭をおこした懐しい霞が谷に新しく年が回つた。谷を出てこの古道に慮してもう幾年か。その谷の昔おもふと彩色のはげた晝のやう瓦師の軒のしめ縄ねば土の土場にさしたみづくし穂長ゆづり葉霜白いなづなをふんでかけてきた吾畜犬もかけ事に暮ををしんだあどけないおとこ女の友達も今は心の繪板戸にのこるばかりだ。一生涯なにしてきたか。世にわれをしる人まれに、故郷の人もしらない硯の田耕すだけでも。病にゐて病に安んじ、貧を學び貧を樂む、雜煮餅三つ祝うてそれがわが正月である。古シャツをぬぎかへたのが新しい年の始だ。それでこの街の裏家で生涯を終るのである。たゞ天は用あるものを殺さないことを信じて幾年か鞭つてきた志なほむちうたうこの筆でこの魂で。わがめざす中原の地は眼の下に横つてゐる。大河の流れるひろ野、

雲のよな檜原杉原、これわがともの領すべき國土でないか。悲みが樂みよりも身に多いと説いた古人の哲學はさもあらばあれ。また蘭を小松をうゑてあるまゝに樂みゆかうその悲も。

新しいいほりをたて、蘭をうゑ小松をうつしすもう今年も。

## 大阪の北濱でよんだ長歌

今橋や高麗橋は黄金でかけられてない、北濱のそのいしかけは白銀でつんでないのに、なぜかしら足をばそこへふみいれるとわが目はくらむ。白煉瓦赤い煉瓦の山のよな大建築はとぼくと下をばたどる自分をばおしつぶしそな。並んでる硝子のまどは左右から冷い眼して懐のわが財布よむ。柔かなソフトの帽子日に光るキツトの靴をかつは呑みかつは吐いてる嚴めしい鐵の扉の入口は嘲つていふ、わたしらの重役さんの晝飯にたらぬ錢をば儲けるにうろつてると。金のため若い時から働いてをる



のだったらもういやだこゝ通るのは、早鮎とぶ吉野の川の水上に廬する  
 がとつぶやいて出た大通、箱のよな烟草の小店バナナうる八百屋の法被、  
 俺のよなともがらもある。煤煙に虐げられた街角の小さい並木のなに君  
 も別に貴いうづ寶もつちやないかのさゝやきに氣をとりなほし、満員の  
 電車の圓い柱をつかむ。

### 歳暮市

額縁は日蔭のかづら。黒豆で市場とかいた入口を潜つてゆくと夜をしら  
 ぬ市のあるさ。晝のやうな八百屋の店の芋慈姑にんじんごぼう。平た  
 くたい近江蕪青はでこ顔の蕪村のやうにはそやかに白い大根は片戀にみ  
 やびをとこなかしめた梶女の素肌。北海の雪の精とも思えない赤い林  
 檜も南國の暑さをみせたむらなりの黄いなバナナもうま酒をなかにたゝ  
 へた柔かい紀州みかんと相並び客をよんでる。店続き隣は魚屋。鹽鮭が細

鉢巻で軒下に足並そろへ、勇しく神輿かいてる。いま風呂をあがつたや  
 うな膚赤い鯛の兄達。黄金に腰屈めてる海老どもは伊勢の議員か。青石  
 の床にねてるはあら尊と釋迦牟尼佛のねはん像のぶりの大魚。荒籠の中  
 でもまれる雑魚ごまめ、プロレタリアの群衆や最大多数や。その次のち  
 いさい店の小障子の平假名文字は竹箸で挟んであげた色香をば買うて歸  
 つて睦じい二人夜食のてんぶらの諸か蓮根か。眞向ひは砂糖屋菓子屋、  
 新しく開いた薬局。低いのは古道具店。みせ先に晒されてゐる歌會の古短  
 冊も新年松がさすがに上べらに束ねられてる。謠本、朱の祝膳、紐はげた  
 百人首の箱。殊にわが心をひくは小べうぶの下にすゑたる風爐釜のさび  
 色のよさ。一服も茶はのまないが方丈のわが小さい室にあんなので松か  
 ぜ鳴らし一切を抛ちさつて静かにも讀めたらあるひは作れたら寒盡きる  
 まで。こんなこと思ひながらに小路ぬけ大路へ出るともうあすのしめ飾  
 りしたその街のゆきゝの人もまた年を越すのにそして新しい年をとるの



に何となく忙がしさうな足ぶりである。

われもまたその畫のなかの人である歳暮の市のよるのにぎはひ。

### お多福によせる長歌

口紅の匹田の小袖、黒髪の綾の襦袢、その昔宮仕してゐたまゝの餘寒の素足。いつたれがさだめにそはぬお多福の名をおはせたの。はだのみは楊貴妃よりも柔かに豊かであると、品高い三位の君にふれられた夜もあつたろに、七代みぬ賢い皇子をその袖でだきまゐらせた、かゞやかな日もあつたろに、なに故に伏見の里の人形師のこんな小店におちぶれてきたのであるか。花白い春の眞晝も、もみぢ葉の時雨にぬれる日の暮も、ひとつよそひで、行く人を見送つてるか。けれどまた思うてみると、につゝじの内侍眉ふり、緋櫻の局の墓に苔むして久しけふでも、美しさ慕ひもとめる風雅男に足をとめさせ、小乗のにがい行者の額をも、しばし

ゆるめる目口鼻、ふくよかな頬、とこ若の姿はひとり世の中にきみあるばかり。薄命のひとか、多福の福々しさちの化身か。たちよつて、尋ねてみても、梅雨晴のはたけに光るにはむめの、ゑみを含んでものいはぬ君。

### 三越の七階の頂でよんだ長歌と反歌

はる霽のなかに秀でて畫のやうな生駒葛城。穩かな茅渚の海からあの山をまぢかに望み、いくさ歌うたひさけんたはやりをの一人やわれも。景色をばゆびさし語る町人のわづらはしさよ。動かない城の天主も、天王寺五重の塔も、しばらくは吾眼からされ。自動車もタイプライタも病院も文字も書籍も心から水泡ときえよやちまたのやねの瓦がふなばたによせるさゝなみ。そればかり、たゞそればかり。大昔神武の帝に供奉した御船さながら七階のこのたかどのが思はれるけふ。



神倭伊波禮毘古命の船にゐてしばしみてゐる生駒かつらぎ。

### 浅ら井の歌

いにしへの若い聖がサマリアの古井に臨みたとへごとのべられたやう、  
この水をのむ者もまたやがて渴くのである。けれどきて酌むやからには  
この井戸は盡きぬ泉と湧きわいてやまないである。すみきつた水の深さは  
ふつ巾をかける縞竹竈吹く煤竹でも測れそな浅ら井だのに、七軒の  
家の女房が振釣瓶巧みになげて朝にくみ晝に夜にくみ草も木もしをれる  
ばかり照りつゞく早の眞夏曉に水桶擔ひ街人がきてくんでさへすぐわい  
て涸れない泉。そのあやし井筒のそばに一株の桃も栽えなきや花に鳴る  
車もかけず、春雨のふりこむまゝに、夏雲のうつるがまゝに、そのまゝ  
にうちすてゝある。草長けて黄な花咲き無花果が若葉展げた破垣の境を  
こえて、釣瓶さげわがきてみると沈んでる緋鯉と鮒は山を出た水晶の中

の鮮かな化石のやうに、はめられた甕のかけから淡青い底の砂までみえ  
すいてゐる。

浅ら井をいのちの水とくみあげて飲むか長屋の友もじぶんも。

### 野 景

蓬のび虎杖たけて繁りゆく草生の中に點々といちごが光る。さき残る紫  
雲英の花も蒲公英も風を含んでまた別の色に匂はてる。穂の出てる麥の  
間に百姓が瓜うゑてると瓦師は草履をつかみ焼瓦やけた窯からつまみだ  
し攫みだしてる。柿若葉清い陰布くその下の茶摘みをんなの華やかな笑  
ひさゝめき。初夏の光とさちと平和の圖繪にみとれてやゝ暫し佇みゐる  
といつゝるか夢眞白な蝶もきて草にねてゐる夢をみてゐる。

### 犬

ひろてきたいのころでさへ三日蓄や日本の犬は蓄主を忘れはしない。わ



うごんで購れきて恩人の家に歸らず新聞で捜されてゐる西洋の卑しい犬よ。そのいぬがはびこりふえて尾を巻いた姿雄雄しい鐵のよな大和心の頼もしいやまとの犬は大方にたえてしまった。噫鐵のよな大和心はたえてしまった。

西洋のいぬをいやしむ心の眼あをくしてゐるいぬを卑む。

### 有島武郎の心中を讀んで 作つた長歌と短歌

若い時主の祈讀み傲然と心のうちでつぶやいてじぶんは言つた。何故に救の主がこのやうな弱い祈を人人に教へてゐるかこころみに遇せてそしてこころみに勝たせ玉へと何故にいはないのかと。けれどその傲慢心は世に立つと瞬くひまに實のならぬ無花果樹のやうおのづから悔と詛の傷痕をのこして枯れた。右の頬を一つ打たれりや左の頬三つ打返しそれで

なほ心は飽かぬ。偽りのあかしは臭い唾のやう口を衝き出る。ユダのやう貨幣のためにいつもかもエスを賣つてる。はらでこそ聖いともがら口でこそ賢者でをるが試惑こころみに一たび遇へば夕立に干場であうた人形屋の土の人形とくたくたに壊れてしまふ「こころみに遇はせず悪より救出し玉へ」は實に人間の弱き脆さを知りぬいた祈であるとひとごとで自分の事でみづからを恥ては悔いた。某の博士のときも罵りの手紙をなだめ戰いてあの祈をば味うてゐたのであつた。萬人に優れた言を吐く人も試惑に遇や萬人の踏んだ足跡またふんで行つたぢやないか。戀八卦柱唇と堀川の浪の鼓と名も知らぬ匹夫匹婦と同じ途いつたぢやないか。人間は平等である。穿いてゐる草履と靴で丈けとみえがちがふばかりだ。嘲るな死んだひとらを。美しい言葉を聯ね凡人を讚美もするな。異端者の吾等も共に膝まづき祈ろぢやないか耶蘇のいのりを。

主の祈判で打つたその悔がまた蘇ることよひこころに。



### ぎいすをよんだ長歌

四二

國學の大人が生れた神杉の涼しい家に傳へられ更に傳はり吾家のうつはとなつた殊更に鳴音わるい古琴をかきならすやう、繁りあひしげり茂つてまだ秋のたゞぬ内から水無月の早のあさの露にさへ亂れかけてる夏草のしげみの中で濁つた音互にたててなき交はずぎいすはうれし。縦に横に棟を並べた細長い借家長屋の通路のせゝこましさにすてゝある木屑紙屑瓜の皮腐つた筵軒の端の襷袢腰巻すゝ黒い下水の流れ。一本の喬木もなく一坪の泉石もない眞裸のはだかのやうな街裏の眞夏の眞晝、米松の松の柱も濃いやにの汗かく家でさめてゐず寝てるでもなく九十五度の暑さにうめく吾夢を夏草分けて流れ出る野邊の清水へ巖陰に寒くも光る高山の雪へ氷へさそてゆくぎいすは嬉し。庭さきの境に沿うて帯ほどに残されてゐる村堰地の草叢にゐて六つ七つけふも鳴きなく涼しわが夢。にはさきにぎいす鳴きなく朝晝に日の暮さへもよるさへもなく。

### ある易者の歌うた長歌

神寂びたこの廻廓に床几すゑとばりをたれて尋ねよる人を觀てから三十の年を閲した。その間みせつけられたさまさまの醜い心美しい物語そりあ蒙求に世説にみえぬ面白い戯曲であつた。吾貧は償はれてる。けふもきた男をんなの四五人の大白痴めら、四十九の午の女が末までも添えるかといふ丑歳は五つ違ひの年上の爺と思ふと十九下の脾若い男、それがまた死んだ娘の婿だつた實の娘の。十の爪柿に染めてたその次のあの獅子鼻は夜逃げする方角までもきいてゆく度せないやつこ。正直がたゞ成功のちかみちと教へてるのに。洋犬の頸輪のやうな印臺の指輪はめてた相場師の赤い慾面緋と淺黄鹿の子の筒に金煙管しのばせてゐたあれは祇園の——。色と慾との二途をかけてゐるとは。色と慾、色と慾とぢや、陰陽が世界を作る。吾生涯みてきた事は大方は色と慾との人海の波瀾で

四三



あつた。色と慾といふものゝ陸にたち観じてみれば人間に善悪がない天人の面と鬼のとその役のちがふばかりだ。そして世は愚人が成功するやうに仕組れてゐる將棋の盤だ。塾を閉ぢ諸生に別れこの古い市に隠れていつのまか耳順もすぎた。鶴髪の翁となつた。人耐へぬ回世の樂米鹽を妻が買ふのに當百が二つしかないある朝もあつたのである。しかしまた易いくらしや。この寒い帳くゞつた船頭のあのこむすこが従五位の福助になり五棟の倉の主人が學校の茶番をしてる絶間ない流轉の中に一脚の床几の上で三十年易にいきてた淡泊な俺のなりはひ。これもまた天からみれば拙作の詩にすぎなかる。日が暮れる、吾世もくれる。どれ歸ろ、どれどれ歸ろ吾陋巷へ。

### 蓮月尼五十回忌に

東山雲をひとねに北山の雪を屏風にちりの世を厭うた尼の五十年またと

世にない風流や清い操や。うすものにはれを縫うた好色の女はどこに。金煙管奢を彫つた富限者もいま何處にゐる。一枚のその筆の跡一塊の土のてあとも世擧つて箱にひめとく。若くつて花のよなみめ、おくれては木の端だつたこの尼の尊さしのぶけふの筵や。

### 星を仰いで獨言する長歌並に反歌

ゆうまぐれ野へ出て空に現れる星を仰ぐと何となくわれがはかなくまた我が頼もしくなる。常世からとこよにわたり亡びない幸の權化や。人がまだ毛物のやうに裸身でくらしをつた洞穴を照した光。ひとの世に大きな愛と望とを與へるためにユダヤ野の小さい邑に産れ出たその嬰兒とうまぶねを照した光。あの光短い俺の世をてらし人世をてらし人の世を終つた後の三千の塵點劫もあのまゝでなほ輝くに人が何自分がなにと冷かな光仰ぐと塵のよな我がはかなく生きるさへ厭はしくなる。けれどま



た人世の業も名も富も國も力もあの星の瞬くひまにうたかたときえさる定め。あの星に比べてみれば英雄も大天才も衆俗も自分もいづれ椀の實の背丈け比べの戯にすぎぬじやないか。その小さい俺等とはいへ嚴かに考へみればみな盡きぬ生命に懸る。月星を鑄たたましひは人間を空しいものに作るまい作つてゐまい。吾呼吸も北斗に響く我意志は天に書かれる。と思つてまた現はれる恒星と笑み交す時己れもまたわがなす業も頼もしくなる。

星みるといつも心の目が覺める醉生夢死の世のやちまたで。

### 草引男を詠んだ長歌と短歌

わが庭の草引男一人かと思つてゐたら年とつた親もきてゐる。白い髮皺深い顔被つてる印手拭纏てゐる小紋の單衣その母も裸足のまゝで縁先の草をひいてる。六疊の自分の室にはわが母が病んでふしをり枕邊でわれ

はものかく。前裁で草引くおやこ兎に角に疊の上で安らかに相倚る母子。彼是とひき比べては梅雨晴の庵のひと時おもてゐる夢の無駄事。けどまこと身をかへてたら彼と是とが。

惻隱の机に凭れしばしのま夢をみてゐる庵の眞晝に。

### 母を葬つたまたあくる日 元政上人の集をよんで作 つた長歌と短歌

初秋の桐の一片とちりはてた母をなげいて悲し日を日毎消しかね盆の日の十六日に草山集取出しみると出たところは廿一の卷『稱心の庵の秋雨』唐歌のその五律には夕立で涼しくなつた一滴も天の賜物母のため祝の杯献じるとしてゐる。けふもまた同じゆだちが涼しさを送つてくるに吾母はいづくにをるか。集をおき身延行記のはじめをば開いてよむと



七十九の母を奉じて八月の十きん日に元政は山を出られた。新曆のその同じ日におれは母を歸らぬ旅にたゞひとりやつたのであるまだ二つ若かつたのに。湯浴して暗がり歸りゆべの事戸口まできてはいつても母はゐないと吐息した凡夫の嘆き。凡夫だといふ人はいへ元政のなげきの歌も七つまであるではないか草山和歌集。

死に別れ母に別れて元政の集よみなげく送火の日に。

### 蘭

春浅い霞ヶ谷でひいてきた蘭の一株。雨そゞぎ雪に打れて二十年青磁の鉢に緑葉を靡かせてゐた。亡くなつた母を悲み初秋の庭をみてるとその長い清い緑が半ばほど切込んである。我母のみとりを逃げたその婆のわざとしたが憤むねに押へてひとふた日黙つてゐると婆子曰く「蘭もほどよく手入してやるがよろしい」髪長い新思想家の斬髪はきれいによか

ろ。どこいてもあつたことかい蘭の葉をかりこむやうなそんな悪婆。

### 老女ご念佛

昔わが借家につた越前の大きな婆は念佛を難有がつて御参りを欠かさなかつた。けれどその仕業をみると人の家の召使らをそゝのかし誑かすなど腹黒い門徒であつた。今年また厨をんなに江州の婆を雇ふとこの婆は煙草のむにも念佛を唱へてをつたが我母の言葉にわざにつ一つ逆らひをむき我にさへ説教きくと雇主に逆らへちふかもうそんな人はいらない出てゆけと怒つて言はせた。その次にきた雇ひども念佛と煙草のすきな小綺麗な婆であつたがゐるうちに胃痛でねたので醫者をよびなほさせたのによくなくて母が代りに病み臥すと逃仕度した。そして夜湯浴にいつて歸らずに寺で泊つた。忌々しそのあくる日に我母は死んだのである。それみると白々しくも居据ろとしてをつたけどこちらではさうはささぬ



と妹にわが家中のそしりばなし遣していんだ知人の家へ御寺へ。念佛の  
すきな老女の心根は嫁ばつかりか自分にも摩訶不可思議の謎だ矛盾だ。  
行住坐臥念佛申す女人らに却つて多い悪氣なものが。

### 北海道から来た手紙をよんで

伊東晋次郎が果樹園を作つてゐるといふ手紙をお  
くつてきたので若年の頃を思出しこの長歌を作る

鋤をとり鋤を荷うてつゞの頃じぶんは思つた今からはもう世に出まい志  
抛ちさつて故郷に隠れすまうとバイロンをウラルツウアルスを星巖を頼  
山陽を貫之を千蔭景樹をみな茶毘にしよと思つた細のよな細路通り山畑  
へ肥料を運んだ枯葉が掩ふ獨活の古根の赤い芽に瘠土盛つた萌え出でる  
蓬に坐り疲れると綻びかけた梅の木に大き呼吸して鶯の聲をばすうた夏  
が来りや裏の畠で淡々し瓜を作つた紫のなすびを切つた轉けあふ芋の葉  
の露芋の葉へこぼしたりしたまた秋は夏草焼いてまだ暑い残暑の土に辨

當から大根をまいた山畑の隅の方には筍の小藪もあつた二三本李もなつ  
た露霧に柿が光つたまた裏の倉の横では胡麻作る阿呆といはれる胡麻さ  
へも筵でほせたあのまゝに土に親みこのからだ土に歸るに甘んじて暮ら  
してゐたらけれどその焼こと思つた本はいま吾本棚に安んじて我を笑ろ  
てる我指はこんな細く我骨はこんなに弱いそれをたゞ天のさだめと悔  
もせず疑もせぬいま人が林檎の木植ゑ苺など培ふといふ話をば遙かにき  
くと草深い霞ヶ谷で人間を相手にせず暮らしたが却つて眞の生涯でな  
かつたるかとまた更に棚の書籍にむけられる目が

### 座古愛子から微光を贈られた時

山のなみ海の波間に清らかな影漂はすよい港神戸の山の學院にねて、道  
説くいつきめの座古の愛子が痿た手に筆さしはさみつね日頃見聞きした  
こと自らのなした業など書きとめたこの微光こそ紫の熟れた無花果その



淡いそして盡きない味ひを誰喜ばぬガリラヤの海のほとりで愛の道漁師  
にといた人の子の足跡ふんで下部の爺厨をんなを枕邊で悔改めさせまた  
遠い野邊にさまよふ小羊を檻へ歸らせ六尺の床にゐながら幾百の靈よび  
さます齋女の座古の愛子は柔かな女であつてそして益良夫

### 白百合を傷む

木村治子は京都中村榮助氏の第二女である、大和葛城村の木  
村氏に嫁し居ること數年病で天上に召された。この頃その小  
傳を書いたが經文の隅のやうにこの長歌を作つた。

葛城の山の氷雨に白百合の花は碎けた。夢の國メソポタミアの野にさい  
たりベカのやうに父母の旨に従ひ牡丹咲く京の都のみやび繪の街を離れ  
て蛇が這ふ鄙の大和の山里へ遠く嫁いだつゝましい神の娘は綾絹で黄金  
で玉で外ばかり飾ろとはせず柔かとそして靜やか隠れたる靈の装に夜明  
けから火焚き水汲み夕には老を慰め聖らかなその行でいとほしむ夫ばか

りか酒を飲み賭事をしてまだ神を知らず畏れぬ村人をしたがはせよと晝  
に夜に祈りもしたに病の魔肉を蝕み夫また弱い器とその妻をいとひあし  
らひ終まで相愛したのにイスラエル十二の支派の大親と成も果さず信仰  
の麥の一粒芽も出さずはかなく腐ちた。天地の神の心は人間の知慧では  
かれぬ故人のした行が天よりの務であつた。知人の大きな望徒らにこれ  
を惜むは不信だと知りつつもなほ葛城の山の氷雨に夏一夜落ちて碎けた  
白百合の短い命傷むけふまた。

葛城の山の麓に主耶蘇の御國建てよと念じてゐたのに。

### 裸童子

青銅の裸童子を神社北野の馬場の縁日の店で見出し若干の錢を投じて洛  
南へ抱いて歸つた大方の花は地に落ち廻廊を圍む大木が細い芽を吹く春  
の暮。あすからは裸のあれに古拾裁つて着せよといひつける妻もゐない



しまたそれをせがみもしない素裸體の可愛い童子はとまつてる左の腕の大蟬を右手で捕ろうとみつめてるその慾の外心さへ素裸である。噫俺もその日があつたそれにいつか大人になつて一匹の虫で飽けない諸の慾のまぼろしあこがれの月日を重ね今になりしらべてみるとどれもく濁江の泡一匹の蟬を欲つした素裸のこどもの時の素裸の心に恥るこの古拾。

青銅の裸童子をつれかへり二人になつた淋し吾家も。

## 夕の聲二首

一

小松うる薄をうるた夕庭に僅かばかりの打水し臥榻をすゑて仰向けに空みてゐると雲のよう去つてまたくるきれぎれのじぶんのおもひ。三年前こゝへ移つて山をみるさちを失ひとしよつた母を喪ひ得たものは生のはか

ない形相と葛藤ばかり。今宵またあの網にかけ大蜘蛛がかよわい蟬を生捕つて餌食にしてる隠元の豆のはたけで一匹の雌犬を追うて痔せやせた雄犬の群が唖りあひかみあつてをる。下の兒に乳を奪はれて上の兒が憤り泣く泣聲のあの凄まじさ。悲と嘆ばかりのわがたまのやすみはどこに。涅槃はあまり寂しく復活の願もうすい。涅槃も復活もされ疲れたるわがあたまにはただ今宵安らかな夢をいな夢の障もなうて迎へたいあす。

二

晝のまの酷い暑さは夕暮の涼しさをうみ痛ましい疲の後に安らかなやすみはきたる。病にも死にも今まで戯れてきたんじやないか。邑ちまた草木も石も焼きつける天竺の日に波羅門はわいたのである。望んでも望まなくても天地はうごきをやめぬ。夏さつてこの町裏もこゝろよい秋の音づれ。明月を迎へるために芋の葉は青々とのび無花果の梢は兒等に甘い實を約束して。虫ないて草叢に白銀の小さい鈴ふり星が出て空一つば



いに輝かな譜をかき列ね大知慧と力をほめる。魂よなぜ膝まづき木陰靜かにいまさない處ない主に祈捧げぬ。

### 石地藏の長歌ごみしか歌

涅槃からゆり起されて石地藏は本意に思ふか迷惑を感じてをるか。源平の時代でなくは應仁の亂の時だろ土深くうづもれはてた幾体の石の地藏は河原町まちをひろげの土方等の鈍い重たい鶴嘴にほりおこされて夏の日の強い光をまぶさうにまたゝきしてる。小車の牛の歩みもゆるやかに春の野に出る四位五位や女房達の頂禮に慈眼をむけたなつかしいこの石地藏。髪亂れ鎧ちぎれた落武者の雑兵共の妄執を嘆いた菩薩。また何の輪廻の故に自動車と電車と麥酒と白粉のこの惡趣の巷をばみるのであるか。やがてまた名のみいつかれ癩病の乞食のやうに壬生寺に集めてられ年月に曝られてゐる菩薩等の數に加はる幾体の石の地藏のこの顔

の泥。

人間のじぶんが憐れむ輪廻してまたも世に出た地藏菩薩を。

### バナナ

蠟でなく チースでもなく ちゝでなく たまごでもない 日にやけて  
 澁はいたよな 南國の 人にきられて 荒編みの 籠の數々 黒潮の  
 浪路はるかに 雪白い 都にうられ 赤い酒 あぶらの肉の さかもり  
 の あとでもとられ 四疊半 二室の中で 幼児が 押合ふ家の 古盆  
 に 腐りかけてる 芭蕉の實 高いかほりと 冷かな 甘さが 人にす  
 きこのまれる

夕立の 玉がころげる葉芭蕉の 天幕思ふ バナナむきむき

### 夢の日記

弟の さきをかんがへ 桐苗を 兄がうるたと 祖母さまは あの檢校



の名曲は あれと二人で きつたいと いはれたとある 三千里 海  
 のかなたに ゐた時の夢の記が出た 土用干に 古本箱に のけたつた  
 古反古出すと 五六枚 インキもさめた 洋紙の綴り

海の外 今は夢みる 夢にみた その故里の 夢の記よんで

### 古 鐘

闇の子の 悪魔の群が ゆすつても ゆるぎもしない 眞四角な 煉瓦  
 の館の あらゝぎを獨で守り その昔 苗木であつた 庭の木が 天つ  
 日かくし 縫上げのきぬきてた兒が 白髪たれ 祈るけふでも 晝も夜  
 も 休みをしらず 夢の床 學びの窓へ 四十年 清い音送る 古鐘は  
 神秘にさびた であるから 吾同志社に まが事が 起る前には あの  
 鐘が 自ら鳴る 眞夜中に 悲みうめく あの時も 鳴つた叫んだ あ  
 の時も さうであつたと ボーイスの 口から口へ 不可思議な 話が

語り傳へられてる

ピユリタンやクエカー人の たましひをもつたよにいふ怪し古鐘

### 百 合

隣人 長屋の爺が わが瓶の 一輪さしに きつてきて くれた鬼百合  
 水そゝぎ 瓶にたてると 咲いたのは 篝火のやう まださかぬ 大き  
 薔は すばめたる 朱傘のやうな 鮮かな その姿をば 朝雲の 清い  
 朝は 青蚊帳を 透かして眺め てる日影 やける眞晝は揺椅子に ゆ  
 られて愛でる 花のいのち 観る聖者には ソロモンの 榮華の時の  
 装ひも紙衣にひとし 野の百合の どんنادつたか エス君の 涼しま  
 なこに 映じたそれは

### 叡山のケーブルカーにのる

### 長歌と短歌



われら今 天にのぼるか 美しい 天の使の 羽衣に ふれもするの  
 カーの鳴る 響につれて 刻々に 身はのぼりゆく 松杉は 忽ち沈み  
 右左 薄茅萱の 青雲が 靡き分れる 群山の 青緑いろの 頂は 頂た  
 て、靴の底 仰ぎみてゐる 大原も 神樂が岡も 加茂川も 淀の流  
 も やちまたの 京のみやこも 一枚の 地圖みたやうに 眼の下に ひ  
 ろがつてゐる 野の石を 枕の夢に さすらひの 子がみたといふて  
 んにとゞく 天のはしだて それをきり こゝにたてたか 大比叡の  
 ケーブルカーの 高さ危さ

若い時 雲母をよちた 大比叡を 電車で登る 夏羽織きて

### 鐵管の泉

鐵のくだ 送り出る 山水を 結ぶ吾手と 袋から銀貨をうける 守錢  
 奴の 手の感覺と 快さ 何れであらう アノクダラ 三ミヤク三ボダ

イの 佛達に 冥加祈つた 傳教の 經翻す 手ざはりは またちがつ  
 たか 朝粥を すゝる山法師 西塔の 驛の二階で ナイフフアーク  
 使ふ女人等 それこれと 怪し思が 横川出る 浮雲のやう 出てはた  
 え たえてまた出る 日枝の山道

岩陰の 泉でないが 大日枝の 鐵の懸樋の 水の冷たさ

### 上州をおもふ長歌並に反歌

前橋のある詩社から歌を乞はれてこれを作る。

山ゆくと巖つんざく温泉が湯壺に溢れ里ゆくと繭の白玉家々の筵に光る  
 上つ毛の國はよい國。青蘆のあしの一葉で梁へきたあの祖師のやう和田  
 の原遠く歸つて十字架と愛と涙で若人を教へ育てた新島の大人の出たく  
 に。年十五家を離れて蟹がゆく文字學びそめ晝よむに机を並べ夜寝るに  
 臥床聯ねたはじめての友の故郷。いまごろは赤城の山の紅葉が錦を織る



か、秋雲が榛名妙義の峯に尾に時雨とふるか。たゞ名だけきいたただけでも霜月のあたゝかい日の親みが身にしみ渡る蠶かふ名山の國その上つ毛は。

いかほろの歌ゆえでない上つ毛がじぶんの心ひきつけるのは。

### 盆 石

浪速津で 買うて歸つた 一塊の 蒼さびた石 眞白な 水盤にのせ  
 何といふ 山の名つけて 朝夕の ながめにしよか 雷鳥の 巢を 夢  
 にみせ 尾根にはふ 五葉の松を 幻に 空しくみせた 文晁の 名山  
 圖會の 名山の 外にもひとつ 名山が 現はれたのだ 名山を 書冊  
 に 收め 山嶽を 書齋にいれる われもまた 摩訶不可思議の 力あ  
 る 維摩と 思もや 病弱を 足枷にして 名山を よちえぬ嘆き そ  
 れもまた 岩室すぎる 雲霧の しばしはきえて 影をとどめぬ

### 掛 軸

春の宵 十五の兄と 十三の 弟二人が 直角に すゑた机で 薄暗い  
 燈火分けて からうたを 作つたことは 四昔の 昔になつた 石盤も  
 古い行燈も 今はもう のこつてゐない ある物は 詩學の本と 朱や  
 墨の 跡濃やかな 青刷の小さい詩稿と 朱の點を 點々打たれた結び  
 の句 「烟水朦朧 春月の天」 の 嬉しい記憶と 諒闇の 正月二日  
 安物の 書畫うる家で 兄弟の 詩をば正した 町儒者の 自畫賛の軸  
 見出した そのうれしさに 持歸り兄にみせると 兄もまた みては巻  
 いては 喜んで まだ淺かつた 人生の 春の夕の 學び事 互に語り  
 世にはやす 應舉貫名の 作よりも なほありがたく 虫ばんだ 紙の  
 かけじを 兄弟が 秘めて楽しむ 老詩人 雙橋先生の ゆかし筆跡  
 祇園街書畫屋の庭に兄とわが唐うた學んだ日が掛つてた



瓶 梅

六四

貴婦人の 細指に まばゆく光る 金剛石も にはひなら 競ほとすま  
い 年の暮 山科の 里からくれた 野梅一枝 小寒も 大寒も ひと  
月たつた 節分による 炒豆の にはひさへする 吾家の柱に壁に 淡  
々し 姿をうつし ふかれてる 苔疎らな 梅の古枝

岩井信實を悼む長歌

つね日頃じぶんは思ふ、なりはひの多い中でも天地に遍く潜む大知慧を  
探る科學者、魂の惱を救ふ祭壇の淨いともから、肉體の病をいやすメス  
と匙とる醫者の三つ、これこそは人の一番しごたへのある業である。詩  
歌などその大方はなかつてもよい遊戯だと。それだのに醫者の岩井はそ  
の高い尊いわざを遍くは施さないで京の町家を開いて三年もたたないう  
ちに榕葉の葉陰に消えた香のうせた薬のやうな詩など遺して、噫戯れの

詩など遺して。

兄の次男の入營を送る歌

この子ゆく國を護りのみたてにとこの子今日ゆく人々が山できつてきた  
松竹の緑の門も小春日の光を含み歡を黙つて語るわが前で小石なげうち  
吾膝で話せがんだ兄の子は若松のやうせたけのび雄々しく育ちその父が  
兄かしたやう劍帯ひ小筒を荷ふつはものに今日なりにゆくこの子策馬は  
つゝがなう一年送れ光秀がたてた丹波のよいまちちまた

御題山色新を詠する長歌並反歌

でゝむしの じぶんのいはは 街裏の 長屋の隣 飲騒ぐ たかどのゝ  
北 端居して 夕の山の 遠青を 甕にもくめな 横雲が 峰をはなれ  
る 曙の 春もすはれぬ さりながら われもくにたみ 賜つた 御題

六五



はよむと 岡のべに きて眺めやる 西東 きたも南も 山城の 列る  
 山の 就中 ひつじさるには ますら夫に 名もなつかしい 男山 石  
 清水湧く 神山が 初日をうけて 紫の 色鮮かに 新しい 清い冠を  
 鳴のたつ 美豆野の上に 端然と 横へてゐる 葛城の 山脈うすい  
 雲形を ゆんでに描き 淀川の 流ひとすぢ 銀のやう 攝津河内の 野  
 へうねる處

初詣 弓矢買てる 人もあるか 紫きよい あの神山で

### 幹槍太の歌集に題する 長歌並反歌

幹の歌よむ度毎に魚河岸のまぐろの鮫と昔わがいつでも行つた黒壁の紅  
 の問屋の大江戸が思出される。人の塵うごめき動く雑沓を電車が搔退け  
 靴のまゝビルディングの巢密蜂がはいつては出る東京が眼に浮びくる。

天麩羅ももう食ひあきて苺と乳匙ですくてる江戸つ兒の歌。

高臺の若葉の陰の長椅子で幹がその歌吟じたいけふ。

### 兒狗を養ふ歌

何奴だ馬鹿にしやがるしらぬまに書齋のえんへ狗の兒をすてゝゆくとは  
 よる一時庭をさまよひ泣きないて人をねさせぬ。管外へ乞食を送る髭黒  
 い巡査のやうに大道へ俺もすてよと夜明まち戸を出てみると足もとへ慕  
 てきたのは初冬の落葉の色の茶ばかりのそして玉ほど尾のさきに白い毛  
 のせてるいちらしいのころである。あはれさにすてにもゆけず飯與へ  
 水を飲ませてそのまゝに家においとく。これもまた戯れ事や。晝でさへ  
 泣くのきいては來い來いと縁から呼ぶとその兒狗すぐに出て來る縁の下  
 から。

何といふ名をつけてやる風呂敷に包んですてにきた茶のこいぬ。



## 伊勢音頭

六八

黄や紅にそめた貝殻、篠笛のおもちやの小笛、合力に土産擔がせ、菜の花の伊勢路で馬を雇うてる嫁や夫婦や。尾を巻いた狗もまだるた春草の草津をたつて、伊勢音頭長閑かにうたひ、唐橋を渡る若い衆。酔人がのどが渴くと逢坂の關の清水を杓で酌むそのあひださへ「やあとこせ」岩間木間にこだましてどよめき渡る坂迎へ喜をのべ喜を答へる人の嬉しさはどんなだつたか。一夜さに百里旅しても一生は千年に延びぬ。はたごやがホテルに變つてもニュートンで客はあるまい。自動車も汽車もラヂオも人間のまことの平和削りさる鉋かんでないか。伊勢音頭あのおだやかな柔かな楽しい節をきいてるとその暫くはいらだし今を忘れて旅脚絆菅の小笠の大平の春にかへれる。いゝしばし時世をこえて憎みなく憤りないユトピアの土を耕すおきて忘れて。

## 軍旗祭をみに行つて

花の日の軍旗まつりや。作り物、假装行列、柴いたゞき尻ふり歩く笠取の立付袴もかねつけた黒齒を出して笑ひこけてる。

雨はれて笠取山の女さへ祭みにきた軍旗のまつり。

## 六波羅かむろ

伊賀栗のゆるゑに牧師が汽車中で取調べられ長髪のために繪かきが屯へと引てゆかれた。灰白の立石のやう洛外の辻に脊廣が行人を怪み睨む。大嘗會ある霜月は六波羅の禿の骸もみめぐみに苔の下から出て舞ふか立つて踊るか活躍するか。

## 上田征路が歸國を送る

## 長歌ご反歌

京の地もくらしにくいと故里の長門へ歸るさち薄い君かけれども『善遊

六九



は悪歸にしかず」鯖が跳ね鯛が躍る海ばたに生を安んじ學び得たその鍼灸で人々の病を癒し釣りながら詩歌も作れ故郷にまさるすみかぞ噫どこに何處にあらうか歸れわが友。

國へ歸る別をつげにきた君としみじみ話す落葉した家。

### 上田穆の歌集に題する長歌と反歌

「丹波えいとこおなごの夜這ひ」そのくはしめが男縞織る杼のやうな小舟儼うて保津川を下る暮春の逸興を思出させるこの歌卷は。兩側の山を繪にした若葉木の樅櫻木、常盤木の小松老松川隈の時代の尖端を鈍らせる五百つ巖群、水底を潜り行く石、そのあひを舟がすべると晴れた日に村雨がふる吾袖に人の袂に。舟板がいはほにすれてはつと眼をふさいだひまに五百里も過去つたよな山姿水態の變化、それでまた洲に乗上げて傍の岩に下ろされ流人のやうな憂目みる笑止さへある。さき舟の薄水色

の繪日傘のエスベラントは燕と共に渡來した眼の碧い客であつたか。忘れてたもう一つある。處々岩根に燃えて京女郎の腰の装の色的な花も咲いてた、あのそれ谷の躑躅が。瀧つ瀬が靜かな入江青淵になると思へば大井川遠い夢の世才人が詩歌管絃の船呼んだ岸。

保津下る奇觀とその才をほめてよむ丹波の人の歌の一卷。

景樹が鳥原の角屋で酔興に變體長歌沙千を作つた氣でこの狂體の歌を作る。著者はエスベラントに得意でまたエロチックな歌に妙を得てをる。桂園秘稿の印刷を終つた後七日の三月七日の夜。

### 無花果の木を惜む長歌と反歌

無花果の 廣葉を愛し 暑い日の 陰を愛して 何人が 植えてをいたか 十五年 借家の裏で 根をばさし 青い芽をふき 幹がのび 枝をひろげて 丸い實が なりはじめた木 彼岸には 移し植よと 母家から 歸りにみると 横さまに ぶつ倒れてる 浅間しく 長屋の人が



切り棄てたのだ 十五年 短くもない 生命をば 情しらずに 一朝に  
奪はれた木よ 槍のたつ 信濃の山で 雪崩れくる 雪と氷に 打たれ  
死に した子ぢやないが 伊勢の海 碧い波間に 魚のやう 泳ぎ戯れ  
溺れ死んだ 學者ぢやないが 天子ちふ 匹夫のために その詩ゆえ 大  
根のやうに 南京の 市に斬られて さらされた 詩人ぢやないが 自  
分には 惜くてならぬ その無花果が

無法にも 鋸切りされた 無花果の 命を惜む 若い命を

### 歌の響

田の中へ天幕を張り信者等が提灯さげて眼の碧い女宣教師も交り五日間  
天父の愛と主イエスの救を叫んだ。若者も老女も共に自らをあかしに立  
てた。暮の内道路の上に群つてきいてた人は何物を得たか知らない。小  
供等が四五日すると歌つてる「みな救はれん」と。歌好きの長屋の嬢も

歌つてる「皆救はれん」と。ナザレンの教會が何して行つたかその外に  
自分は知らぬ。兎に角に「みな救はれん」の讚美歌のその一篇を界限の  
人の間に植ゑつけていつたのである。どうそれがなるかならぬか天が知  
るたゞ天が知るその歌の響きは。

### こし水

井戸掘がもてきてくれた川底の小砂利にかへて伏見山古城の跡の山陰の  
溪にはへてる水苔を晒したやうな漉草で濁水こす。水道の水もこし水こ  
し桶も水道である。七年前小家をたて、井を穿ち水が出た時晝も夜も清  
水を啜る俺だのに赤鐵氣では堪らぬとあとすさりして古家にとまるとし  
たがけれどまた天が與へたものだから受るといつて汲上げてこしてきた  
のだ。乾き切つた冬の水涸れ雨のない夏の旱は近所からにはまさる  
この井戸へ酌みにさへくる。米をとき野菜を洗ひ暑い日は瓜も冷やせて



いつのまか善悪忘れ汲むわれの心のやうに濁つたり澄んだりしてゐる泉をば汲上げてこし水溜めに湛へてみるとしんざんの水晶が溶けて岩壁にせかれたやうに水面から底まですんで澄切つて形相もなく今はわれ屋並の井戸の並井戸の水より淨い泉をば飲む。

濁り井も天の與へたものであるわが漉水の淨ささやけさ。

### もらひ風呂

昔われ北國にゐて町にある五つの湯屋の戸を潜り湯浴びしてみた。今はわれ狭い湯殿に鐵鍋を湯槽とすゑた長洲風呂貰ひにくるのだ。入りしなも遠慮なしに大聲で水持てこさせ嫂にいつか貰つた藤の森神輿の會の昆布のよな厚い木綿の手拭の摸様に匂ふ藤の花湯船に浮かす。洗場で母が洗つてくれたやう大根も洗ひ葱も洗ひ六根清淨また元の鍋につかると足裏をげす板潜る熱湯の鍔にさゝれ驚いて湯から飛出しそのまゝに上つて

しまふこともたびく。湯錢をば拂はぬ代り出てきては不足もいはず熱つなつて飛上つたと臺どこであくを待つてたぬる好きの若者感し聊かは仇打つとく。行往坐臥じぶんにとつて大方は遊戯であるが就中年中貰ふ兄の家の長洲風呂の熱さ可笑しさ。

### 古道の家

吾家は修道院の沈黙と森の靜かさ。十歩ほど街道へ出るとこの家は放送局だ人知らぬ通信社である。嫁がきた、市場が立つた、喧嘩した、損した、儲けた、夜逃した、妾してゐる、後家やまめ、婆と和尚がと人が來て談してゐんだ浮世繪の浮世のさまが私語の笈を傳ひ耳へ落ちくる。

### 簡易保険

簡易保険加入して下さい五千兩も貯金してゐるがおつきあひに掛けますと笑ひもうぢきに四ヶ年になる。月々に朔日の日にロボットの人間のやう臺



所へ戸をあけてきて靴あけ印肉出して通帳に赤い判押しロボットの機械のやうに出す金を受取つていぬ小倉服の集金人と友だちになつてしまつた。あれでまたいにしなにちよと世の噂政治の談のこしゆくゆとりもつてる。何のため保険かけるか。葬斂の金もいらぬ。養老の資にもならない。親は死に子も妻もない。何故の掛金なのか。おつきあひにしてらんぢやないか。何人におつき合ふのか。その影もみたことがない。何のためか解らないけど通帳を赤辨慶にして雪のちる寒いこのあさ『へい御面倒』『苦勞さま』と挨拶を互に交はし友人を送る。

あてもない簡易保険の金拂ふ商人の忌む朔日の朝。

## 牛 乳

若い時病に臥して牛の乳は多量にのめぬと醫博士の命を拒んだ醫博士はそれなら乳で飯をたけ水かさがへると更に勧めた。乳の飯それに落した

半熱の卵の力さすが自分も暫くは肉づいていた。新しいちよを得るため椿咲く古城の跡を梨の花雨に濡ふ川沿の牧場へ下り搾るちを待つて買った。土鍋から吹出よとする牛乳のその飯ときは家にをり他郷にをつて三四年續いたである。再びの病に再び吾山に歸つてからも牛乳は廿幾年厨から絶えないのである。牛ちなど何にもならぬ百合をくへ蓮根をくへ泥にゐる鱈をくへとドクトルがいふまゝに食た。牛の乳をけれど自分は吾家から退けなんだ。湯茶として牛乳を飲んだ。冷い乳冷い水はわが力なくさめである人々が酒と烟草のやめられぬ執着のやう我もまた乳を絶たない。シヤムペンの酒はうまいが一瓶は仕事なくした同胞を廿日養えるそれほどの高い價だ。ブルジョアは奢侈と虚榮で揚々とそのつめをぬく。カクテルは人の味覺を誑かす美しい魔だ。若者は質札ポケットに昂然と杯あげる。大昔病で少し衰へた釋迦牟尼佛に大弟子が外でもとめてやしなひに捧げた物は一鉢の牛乳であつた。水と乳、水と乳だとビュリタ



ンの子（註、文豪ホーソルン）が筆にした清浄な家と都は幾代へたら實現するか。法を説き道を弘める器ではない我ながら水のみ乳を啜つて桃林に牛を放つた王道は夢にしえられる水と乳、水と乳との貧素な厨。

牛の乳コーヒに注ぎ湯茶にのみ自分の簡素な思想にも盛る。

### 運命の歌

働いて若い時から働いて働きつめて古稀をこえた繭商人は長者にもならず死んだ。働きの足りないのではない。それだけの運命なんだ。葬式の籠昇をする父親をもつたがために數學のその天才が砲兵の士官になれず劍鳴らす竹馬の友を瓜運ぶトラツクの上から恨を吞んで眺めてる悲し運命。總領の甚六地主倍の値で砂と石との瘠畑を抱かされたのに近か隣大みさざきがいつき築かれ瘠畑が街に變つた。知慧の足らぬ幸運である。古い都の高名な畫伯の家に秀才の弟子が二人ゐた。畫の技に甲乙なかつ

たがその一人風雲に際會し名も富も得たのに一人は埋れ木で死んでしまつた。これもまた運命である。運鈍根けども大方その運が鈍根をさへ蔑みし己れ一人帝王の権力をふるふのである。

みな人は圖をひいてる不可思議なそして不公平な運命の籤。

### 言あげせぬ國

言靈のさきほふ國か言あげせぬ啞とどもりが世離れてすむ島國か。言語には宰我と子貢、雄辯はデモセニス、シセロと唱はれた世界に列び立ち思ふこと口にしえない牛馬で甘んじてゐる。臣民のいのちと血肉をすめらぎの楯にしたがる愚な鈍な北方の強。一滴の血をも流さず三寸の舌と一寸のペン先が齊魯の國をひとつまみの土ほどもなく易々と運びさつた力を忘れてゐたか。

與へられた口と舌とが使えないで言擧せぬと自ら欺くな。



## 宗且狐の祠をよんだ長歌

相國寺鐘樓近く近い頃宗且狐の殿しい祠が立つた。傳へいふ竹の林に團れた寺のひんがし御垣守る衛士がすんでた塔の段の淋しい街に棋好の好きしやがをつた。類を以て集る友がこゝへきて烏鷲の争に常に夜を更かしてゐたがその客の圓居に交り十徳の姿に化けて同じやう碁打にふかす碁好きの狐があつた。負け碁になれば尾を出す可笑しきに古狐とは人々に知られたけれど人は皆それともいはず茶坊主の宗且として親んでをつたのである。ある日その客の一人が禁物の鼠の油揚げ作りおき棋の席上で宗且よ欲しくはないかと意地悪くその鼻先へ振つてみせた。宗且は笑ふ。こゝろたが夜が深けて人が散じると引返しその禁物の油揚とつて食たので神通の力を失ひ畜犬に噛み殺されたと。藝術は偽である。人はみなうそと知りしり芝居みる小説に泣く。そらごとの源氏物語の夕顔の屋敷が

残り下市の鮎屋お里の舊跡もある世でないか。禪寺にはこらまで建て誰がまたその幻と偽を樂むのだる茶坊主の宗且狐のつくり話を。

偽と知りしり人は樂むか宗且狐のはなしとほこら。

## 藤森祭

晩春に笥を堀り初夏は茶の焙爐してやうやくにそれがしまふと藤森祭がきてる。朝からの街の賑ひどよめきは「馬飛び人走る」駈け馬の藝からである。友染の袖に襷し網襦袢細鞭ふるひ里人が馬を驅けらす。馬の脊に立乗する者逆さまに杉立する者下り藤垂れ下る者日の丸の扇ふる者墨濃くも馬の字書く者それぞれに秘藝をみせて一町が終れば一町また一町遠くかけ去る。その後を幟靡かせ法螺鳴らし追うて來たのは華やかな武者の行列。古の戦陣にみた種々の武器甲冑や、艶なのは緋絨の鎧日に閃めく鉄形の兜、殊更に強さうなのは紫陽花の紫絨水に鳴く水牛のかぶと。



三足も重ねた草鞋六尺の馬に跨り鐵扇を握るのもゐる。一騎二騎三騎四騎五騎敷へると十五騎二十騎。直垂に金冠かぶり夕暮の月毛の駒に乗つてゐる兒の美しさ。花をさし屏風を列ね家々は粽をほどく一夜鮎客をもてなす鯛きつて酒をすゝめる「日如年」と誰かいつた程長いこの日に。元政が祭を見せに母刀自をつれて出られたみづくし菖蒲の家は街道のどこの家だろ。神杉の稻荷の馬場で若い衆が神輿を下ろし藤の森の地返へせかへせを大聲で呼び叫ぶのに負けん氣の東丸でももう三年もう三年と御幣ふり断りいつたか。街々にアイスクリーム賣り歩く聲断えくく長い日も遂にくれたがその神輿まだ歸りこぬ日がくれたけど。

註、馬飛人走は元政上人の詩句

### 勅題 曉 鷄 聲

幼頃師走のはじめ 白脚絆醬油もてくる 商人が配つていんだ 新しい

柱曆の 色刷の美しい繪は 暗闇の天の岩戸の 戸の前で神樂舞する  
 神々と頸毛腰毛の 黄金色した雄鷄の姿であつた。おけら火の淨い火繩  
 で 火を焚やし燈火ともし 家中が老も若いも 塗椀で雜煮祝ふ利郡  
 米倉と納屋の間で 曉のやみを破つて 諸の聲に魁け 朗らかな聲あげ  
 たのは 我家の雄々しくだけ。長い夜の眠がさめて とりとめもない  
 おもひでの 煩ひにねられないので 獨寝の枕に近い 本棚のエマスン  
 の文 杜子美の詩持出してきた 黙々と讀んでゆく時 忽然と一聲あげ  
 て 深い夜を啼破るのは 裏か隣の鷄の雄鳥であつた。そしてその本の  
 魅力は 花罌粟の阿片のやうに 自分をば再び夢へ 導いてゆくのであ  
 った。噫曉のにはとりの聲 陰深い竹の林に 暖かな春の律呂を 搖が  
 せて鳴く鷺も 深山幽谷にこだまして そゝり立つ巖の隙に 咲きさか  
 る石楠の花 ふるひ落す駒鳥の音も ガラス戸の理髪の軒の 金網の玉  
 座に坐り 生真面目な「馬鹿」で「お早よ」で 小供等を不思議がらせ



る インコウもさもあらばあれ まつくらな闇に長鳴き 曙の望を歌ふ  
華やかなそしてたのもし には鳥の鳥の八聲に しくものはない。  
夜の闇も愁も共にきえてゆく光を叫ぶ雞の八聲に。

### 夏の不順によんだ歌

てつさへもなまけ膨れる三伏の暑い土用が昨日ふり今日も雨降り帷子の  
薄さ叩つまあすはもう秋のたつ日だ。いんげ豆の花の疎らさ赤毛ふく南  
蠻黍の實の細さ木の弱々しさ。日の照らぬ水田の苗は青薄せばかりのび  
て太るべき株もふとらす来る秋の不作を思ひ村人は憂に沈む。日が照れ  
ばひでりを憂ひながめには雨に苦む野に立つて自然と闘ひ歎まぐは土に  
汗して働かぬ人を養ふからいなりはひ。

### 碧梧桐

高過ぎて夕日遮る冷かな陰を落さぬ碧梧桐の木を取除き無花果をうるよ

としたが亡母とこゝへきた時移し植ゑ七年あまり親んだ庭の木である。

庭木でも無惨と切倒しその命とるに忍びぬ。けれどまた切倒さねば無花  
果の木が育たない。かんざしの翡翠の玉の香爐の青磁のつやの瑞々しこ  
の碧梧桐と幹を撫で枝を仰ぎ視淋しくも居室へ歸ると家を建てた幼馴染  
の吾朋の大工が貰ふと植木師がそとからつけた。そして二人が枝拂ひ根  
土を除きその家へ荷うていつた。無花果は庭に生ひたてあを梧はわが七  
年の親みを根につけたまゝ卯之さんと呼べば答へるあの家で更に芽をふ  
き涼し陰させ。

切倒さねばならなんだ碧梧桐を人が貰つて嬉しい日暮。

### 古句を集めて菊花を詠む

けふになつて菊作らうと思ひもせず剪れといふまゝ亂れさく隣畠の黄菊  
白菊その外の名もきり歸り唐銅の花いけにいけ陶物の瓶にもさして満室



の秋の香をかぐ。沈香も伽羅のほひも米松の家にふさはず青丹よしバリの都の價高いにほひあぶらをそぐべき髪長でない。登高の賦は思うても海内の文章布衣に落つなど吐く意氣もなく横にさき斜に開きつころはぬ姿をみやり満頭に菊花挿んで歸る人の醉態しのぶひるも臥ながら。

### 鐵 亞 鈴

三十年我に伴ふ五ポンドの鐵の亞鈴は千船よる神戸の街の丸善の店でもとめた唯一の運動具である。イギリスの人かどはかきに欺かれて賣られていつてアメリカの木綿扇で故郷をしのんで泣いた酋長の子はこれほどに眞黒であつたであろか。雨ふれば笠取山の紅葉を袖にしてくるあの里の女の染めた美しい齒には勝てまい。雨の晝雪の日の暮一たびに百度ふるとそのきゝめ大峰さんの陀羅尼助の薬より強くぶすくと脊中に燃えぬ吾侍者である。

る伊吹山の艾にまさり吾胃腑はねじかけられた大時計のやうに働く。やせ果てたからだをみてはみな醫者がそんな無茶しやいけないと諫めるのだが黒ん坊の鐵の亞鈴は鐵漿つけて紺がすりきた女房よりなくてはならぬ吾侍者である。  
重もりにも金槌にも使はれ鐵亞鈴吾生涯に伴うてきた。

### 奥村鶴翁から竹印を贈られて

深草の竹の葉山の萬竿の竹に親しみ生ひ立つた自分にうれし竹根の二字の篆刻、清風を書卷に起し明月を硯池に落す鶴翁の風雅心の一節かこれ。  
竹林の七賢の一人になぞらへてその句を思ふ印刀を偲ぶ。

### 鞍馬の裏山をおりて

古杉の暗い山路を詩の巨人ダンテが地獄へ下りてつた淋し心でとぼく



と獨おりゆく帽子うつ椎の實もなく袖に照るもみぢばもないたゞ暗い険しいみちを。この路を下り盡したら谷底に貴船の社があると聞いたそれを頼みに鞍馬山おりても下りても木ばかりのその裏山を獨りおりゆく。山おりて鐵輪の曲おもふ力もなく貴船の社のしたで息つく。

### 國際聯盟

弱きを憐み強きを憎むは人間の天性である。弱いはがけれど必ず正しいときまつてをらす強い方が必ず悪いといふことは出来ないのである。武士に手を捻ぢあげられた拘摸の兒を正しとするが國際正義か。下着をも脱いでやつたら彼は遂に我等の皮を剥ぎとるのである。

### 三人の労働者

暗闇の路も鳥も眞白に埋れはてたその上になほ降り積る大雪の曉早くいついた窓に音させ現とも夢ともしらす目を覺し驚く吾に新しい香りの

高い牛の乳を飲ませてくれる若者の日毎の勤め。ふむ土は足をやきそに燃てる日を照返すいしごろに目もまひさうな眞夏日の暑さに逆ひせなの汗額のしづく喘ぎく吾國から懐しいたより投込み分秒の時を偷んで井戸水を汲上げてのむ郵便の配達男。湯浴してからだも軽く、人々が泡立つ酒に冷かな魚の脰にまどろして箸とる時も家々が花の遊のくたびれを草餅出して語合ふ春の日暮も一日の世界の歴史戀と名と慾とのうめく人間の活きた芝居の夕刊を格子に挿みまた驅ける素足の少年。さゝやかな吾生活の歡びと慰めであるこの三つが世になかつたら三人がもし來なんだらわがくらし草も木もなく掬ふべき泉も湧かぬアラビアの沙漠のやうに味氣なかるに。

### 發作

ルムペンになつた若者手渡した金で宿とり、斬髪もけふはしてきた。豚



箱へ七日ぶちこみ且つなぐつた警官の横暴とクリスチャンで大金持の外祖父の談するうち、わたくしもクリスチャンだがこの上は仰山黨になり飽くまでも警官の奴やクリスチャンと闘ふつもりと、腕を張り目をば瞋らし、持つてゐた狂氣の發作に責のない主人にさへも、さあ旅費を賠償せよと言葉荒く食つて掛つた、正面の壁にやさしく疲れた者重きを負ふ者はわれにこいと手をひろげ玉ふ君耶穌のゑすがたの前そのあしもとで。氣が鎮り新聞配達してゐる歌も畫もかく小さい若者。

### 額 ぶ ち

「建築の七つの燈火」でラスキンは犠牲の藝術を説き、價高いにはひあぶらをマグダラのマリヤがエスに注いだと同じ犠牲の心をば教へてくれた。あの畫師がかいて贈つたゑすがたは主耶穌の姿。額縁は塗りは安物。イエスへの小さい犠牲は高いけどあの黒柿かしま柿をまた來て買ほと荷

物手に疲れて歸つた。次の日に街を通ると骨董のしにせの店の幅長けも丁度あうてる古物の華梨の額の地味なのが氣にいつたのでさきの日の犠牲の品の半値にもたらぬ品だが耶穌像をそれに納めた。そしてこの二三年來お粗末な大工小屋のよな値の安いくわりんの額に救主エスの御姿ひゞ仰ぎゐる。

ゴシックの大會堂でないこの陋室卑くさもしいじぶんの心。

### 初 夏

色浅い翡翠のやうな虎杖のむらたつ溪を幻に今はみてゐる。禪師がもつ朱塗の如意のぜんまいを生木の鞭で薙ぎ倒した幼馴染の山崖の小路をしのぶ。足を刺し裾に絡んだ棘々しい荆でさへも軟かに蘇りくる硬ばつた心の底に。深草の霞ヶ谷の山を出てもう二十年。春去つて夏はまたまた約束もしないのにきた。晝飯の歸りにみるとにち日の糧の價も拂はない



町人啣つあつしきた米屋の主人梁に梯子をかけてまだ見ないつばくろの  
巢の板うちつける。

### 暑夕偶語

生も死も尋常の茶飯事。時を惜むそれは凡夫だ。庭石は暑ささめゆき、  
草叢にはや虫の聲。水を飲ませて夕顔をいたはり、床几に臥して金星を  
観る。悠遠なこの天や地や、一瞬の憶年と等しいことわりを知る。

### 骨董市

廣告に誘ひ出されてけふはまた道具市する中京の館へ上つた。芦屋釜、  
椎朱の香盒、光琳の花鳥の屏風、竹田の山水の軸、それを買ふ貨幣も持  
たず買うたかて日野の外山の丈室の吾陋屋にふさはない器だけれど幾世  
々の大和島根の國民のみやび心が偲ばれるそのためにきた。盆栽の梅の

古幹紅白に咲分けの木瓜小倉山峯の秋をもおもはせる楓の木立それさへ  
も外國にない日の本のたくみの才の閃きでないか。

### 東山公園で

春の日は長閑かにもえて花祭染織祭花電車都踊と人はみな野邊に山邊に  
やちまたに出ては樂む。折柄に華頂山では黒染の聖しのぶと錦欄の袈裟  
ころもきた法師等が堂練り歩く。水の上の麩をつゝく鯉花陰で酒啜る人。  
寺々は諸行無常の古鐘をつき忘れたか人間の遊戯とことにはやむ時がな  
い。

### ラヂオ

琴唄の屋島をきけば亡き母の聲なつかしく觀世の安宅きいては亡き父の  
面影しのぶ。暖かな春のあしたはあめ地の神を讚美の合唱のクワイヤの



聲にアメリカの教會堂の靜肅な主の日夢みる。ある時は女役者の泣聲となまめく歌に大衆の快樂を悟る。ある時は萱野をぬらす陸の奥のさんざ時雨に高樓の杯仰む。並ひきく妻もないのにけふ晝の御馳走といふはかき飯や蕪菁の料理。芝居みる盲目のやうにめふさいで鬻のみえない大角力やベースボールのバットのおときくのも可笑し。何者の力かこれは。大宇宙造つた神の。誰がこの摩訶不思議の力をば捉え得たのかイタリ一の若い天才老てなほ研鑽やめぬマルコニー侯。

## 春

木蓮の玉は頽れた。連翹の黄金もはげた。春は今たけなはである。蒲公英は誰の王座か。みちばたの土筆の筆よ春愁の賦などは書くな。桃がさく杏の花は薄べに、梨も眞白に。蜜蜂は小さい家で人間に蜜をば釀す。今こそは希望とそして悅樂の季節でないか、日が遅い春分の後清明の前。

## 清水寺

花の雲舞臺にかゝり花の雪溪にこぼれる清水の彌生半ばの物寂びのなかの賑ひ。花陰で酒うる小家蓬餅ひさぐ掛茶屋衣の香や釵の光語りゆく人々の聲。絶間ない下駄の音さへのどやかなこの詣で日や。見渡せば御室嵐さん夢のよな春靄の中。人も日もはや引潮の午後五時もすぎてゐた頃あらゝぎの前を通つて詣できた女があつた。中京の華奢な女房か咲き盛る花の祇園の花守の女主人か。敷しれぬ蠟燭がもえ盡でさへ暗い冷たい内陣の前に額づきしばしのみ念じてゐたが念じ終るとつと立上り傍の漆の黒い籠箱を小さくゆさぶり御籤引き小錢を出して占書を買ふとそゝくさ一二間太い柱の人知らぬ陰に退きその占をそとよみ返し嬉しそにゑみを洩した。その女何を願たか。うら書を竊みみたのは古額の欄間の上で鎧引く曾我の五郎と朝比奈ばかり。



## 學生相撲をみる

いにしへのギリシア人は裸體美をたゞへ尊び殊更に若いをこのはだか身を美しくしとみた。我國の角力の技もつく／＼と思へばそこに裸體美が意識せられる。まして吾祖父會祖父の前の代の若い衆達の宮角力の形を變へて現代に興隆してきた勇しい強い清らかな學生相撲よ生來の力と力きはめえたわざと技とで勝敗を土俵で争ふ。ヘクタでもアキリスでもないこれはこれ大和嶋根の益良夫の木彫の生き身。笥が己に皮脱ぎ麥の穂が色づきかけた初夏のやゝ暑い日を我もまた身に浴びながら敗けるので昔知られた京角力の六十男撰手をばみな知つてそな話好きのフアンの間で日の丸の扇片手に手拭を腰に垂らして且つ叫びかつ踊つてる制服の陰からやをら清淨な土俵へ上つた學生の小野川君やこれと組む雷電君をしつとみてゐる。

皇太子殿下の御誕生を祝ひ奉る  
長歌並に反歌

三千歳に僅か一たびあるなしの星の異象を夕空に觀たと思ふと一陽の來復の日の翌る朝望の朝に天つ日の日嗣の皇子はやがて出る日を促して産聲を雄叫び玉うた大昔ユダヤの野邊の同じよな星のしるしに神人が生れたといふ祝日の二日前の日。このみこが人と成らせてしらしめす大御代こそは三千とせに一たびもない御榮をやまとの國の國民は仰ぐのである。明治から大正を経て今に至る六十年間われ人がみて歡んだ大事も盡くその前驅まへぶであるのでなかるか。ことさへぐ海の外まで敷島の大和言葉なごを弘めよとさけぶ歌人われ老て獨羨む次々に生立ち生れこの皇子の榮の光浴びられる幼児達を。感激の湧てやまない甲戌の年の初水汲上げてしらしめす世を豫め想ひまはせはあゝ愉しあゝまた悲し今からのもう百年



が生きてられたら。

豫めしろしめす代も頌めまつるお生れなさつた皇子を祝して。

## 大和民族

風俗や言語をみても文化史を考へみても西藏と我日本は同族の間柄だと  
慧海師がラヂオで説いた翌る朝新聞みると記者二人駱駝のせなの隊商の  
間に伍してインダスの河上遠くカイバルの天險越えてアフガンの都へは  
いつた寫眞畫と地圖とさうして勇壯な記事が出てゐた。そしてまた二三  
日すると舊約のふみで名高い南國のシバの女王の遠裔のエチオピア國の  
王孫のまぐはひにより灼々の桃の華さく處女子がこゝに歸ぐと目みはら  
す新聞も出た。ひんがしの日の本つ國その兒等が萬里の波こえとつ國へ  
大和心を宣べゆくは夢まぼろしでない今はうつゝだ。

桃之天々。灼々其華。之子于歸。宜其室家。(詩經)

## 祖先崇拜

今もある大和高田は古の蘇我氏の領地それ故に入鹿を誅した社稷の臣鎌  
足公が祭られる多武峰へは詣でない習慣ときく。こりあ何の祖先崇拜か。  
雨が降る笠置の奥の飛鳥路の村人共は其昔賊軍をあないし行在所焼拂は  
せた。先生はこんな先祖の崇拜を教へてゐるか。尊氏の眉一つでも美し  
とほめるものなら罵のピストルがとぶ今の世に遠孫達は賊臣の罪を憎ん  
でその人を崇拜するか。幸に自分はその任でない祖先崇拜を人に向つて  
説くこともいらぬ。

## やはり深草

深草の野とは名ばかり家がたち街が作られ草にすむ鶉の代り大道を自動  
車が飛ぶ。さりながら自分はひとり街裏にすむかひあつて夏が來りや矢



張深草。草村にぎいすが吟じ破垣のあひだ潜つて招かぬに隣島のナンキ  
ンが吾庭に咲き黄な花が大きい實になる蓄音器ラヂオの世など知らぬ顔し  
て。

### 人種平等、ある基督教徒へ

あめ地を創つた神は人間の父だそうして萬國の民は兄弟姉妹だと耶蘇の  
道説く法の師は吾等に教へた。五人種が神の御前で等しとの平等觀もま  
たそこに根ざしてをるのだ。神の子と兄弟姉妹噫それがいかに我等に感  
激の血を沸かさせたか若かつた友はみな知る。けれどあの達磨やボーロ  
を黒船にのせて送つた國民は何してきたか。いと小さい黒い兄弟を十字  
架ぐち焼いてをるのだ。平等なをとこ女が祭壇で愛の誓をなすことを許  
さないのだ。獨居の夫が妻をうら若い子息娘が配偶つれあひを海の外から招くの  
を禁じてをるのだ。戦を詰つて已れ戦ほとしてをつたのだ。國際の大會

議でも白晝に人種平等を葬つてしまつたぢやないか。法の師が人に教へ  
た神の前の人類平等は日の沈む國々のみの平等でなかつた筈だ。十字架  
のいくさの友よワシントン、リンカーン等の大業をせめ詛ふよな美しい  
天の使の平和の譜奏でる前に眼の碧い國民に向ひ萬民の兄弟姉妹五人種  
の無差別平等を大獅吼なせにしないか黒髪くろかみの國に生れた男のくせに。

### 殺生戒

釋迦牟尼は五戒の一に殺生を戒められた。大乘の偽起り二千年勝手さま  
ゝに佛道は歪められてる。忍辱の法衣きながら鉞劍人をば殺し修羅道を  
現することを勧めるが佛の弟子か。釋尊のおん名によつて噫われは小島  
の中の阿羅漢を卑しむ。

### 眞言宗の企をきいて

釋迦牟尼の佛の道は忍辱と慈悲とでないか。修羅道を敷きはかなみ遁世



した熊谷次郎も賊臣の尊氏でさへ古の聖はぜじは一切を濟度したけど武者のため弓矢を捧げ劍をは作りはせなんだ。袖にする珠數の珠ほど數多い録寡孤獨を三密の教をきかぬ衆生を憐む眼なく已等と同じともがら歛持だすハムマ握らぬ青白い吾等に媚びて殺生の機械作ると佛道を忘れてしまひ逆まに御經あけてる眞言坊主。

### 九月十八日

忘れるな九月十八日と日本でも支那でもさげぶ。彼はうらみ我はにくみをいつまでも語りあふそばで只獨り同文同種が涙流してゐる。

兄弟を赦すと互に言へないか同文同種を口にしながら。

### 鳥部山

秋風がまた吹いてきた鳥部山見渡すかぎり灰色の大きく小さく數しれぬ淋し石塔。平安の遠昔から人間のはかない命をあだし野と並びよばれて

口に説き本にかゝれたこの山はやはり墓場だ。五百年千年のちまでいつまでも墓場であらう。けれどみよ人が最後の唯一の安息所やすみどころと思てゐるその墓さへもたよりにはならぬはかなさ。七百年保元平治のそのかみの石塔があるか。三百年慶長元和の墓石がどこに立つてる。雨風に古び苔さび刻まれた字も壊れてるそれでさへ元祿以後の新しいものばかりだ。噫人よたゞ漠然と崇めるちふ三百年前の先祖等はどこにゐるのだ。三百年のちは君等の石塔も掘られ壊かれゆかりもない他人の先祖の墓石が代るのでないか。秋風がまた吹いてきた鳥部山線香と櫛と執着の硬い墓石。何物の科學か藝術か何物の金銀か土地か何物の權利か義務か。人間よ君等の名は一つ。空の空一切空だ永遠の安宅を別に求めなければ。

### 五 條

大和大路狭い街角。これからが軒も風雅な五條坂陶師の街だ。柔かな線



と色だが土や石は身につかぬので来たみちへ踵を返す。焼酎や栗や葡萄や鯖の鮫蒲鉾かしわシャツ萬套帯や着物や。食える物きられる物に右左心引かれて秋寒の酒も飲まぬに千鳥足また大橋の袂へ戻る。

### 菊

白菊と小さい黄菊を兩三枝もろて歸つて細形の花びんにさした。晩秋の日ざしに蒸され芬々と放つにはひや。木版の新古今集に横本の咏物詩選に絹紬の縞の蒲團にそしてもう花よりさきに眞白な霜を帯びて兩鬢に短い髪に六疊の狭い書齋に隈もなく浸み透りそな。菊のこの古いにはひだバイオレット薔薇のローズ安南でとれる麝香も手弱女がバリの都で包むちふにはひ油も菊の香のこの帝座をは侵しうるものはあるまい。ましてわが一天萬乗の大君の錦の御旗に燦として輝く御紋。噫けふは十一月三日。明治節の祝ひの午砲が殷々と野越え街こえ響きはじた。

### 颯 風

弘安のむかし蒙古の戦船叩き破つた神風は京大阪を魔のやうに荒らし廻つて半時で天孫人種の敷しれぬ家といのちを踏み躪り亡しきつた。神風か魔王の風か。神山に三百年立つ大木もみな倒された。四天王が支へてゐさうな伽藍さへ倒れたうへに信篤い人を殺した。神風か魔王の風か。人はまた神の忌垣にこけるよな木をうえてゐる。いつかまた善男善女の命をば奪ふであらう莊嚴な五重の塔をたてよとしてゐる。

### 羊牧ひに寄せる

關西學院の學生數名が先輩の勞働生活を學んで野羊を牧ひその乳を配達する自助會を起したので。

カルデヤの野で羊牧ひ月星を夜ごと眺めて天文の學を創めた傳説は太古のこと。豫言者が王者の相を野の家で待ちわびて觀た季の子のグビデは



羊牧うてゐた少年だった。教主誕生あつた喜のおとづれをまづきいたのも羊の群を番してたそのひつじかひ。日々の糧ばかりではない星のよな智慧も力もまぼろしも君等の物だ武庫山の原はよい牧飼へ羊かへ。

## 詩 選

新 曲 あ ま

うしほにぬれた黒髪がかわくとすればまたぬれて涙ひまないあまが身や。梶の葉につけておもひを流したとてもまたまとる南の島は海三千里。手かへしなかへ晝に夜にどこまでわれをせめるやら目には港のうづだから身にはまゝしい答しもと。ひとの操が珊瑚じゆの買はれるものと思もてゐる七つの船のもちぬしのそのいやしさよ命にさへもかへられぬ處女心を。ひととせに星もひとたびあふちふに三年よとせをわが夢の人はいつまで浦へかへらぬ。



## 新 しらいご

ふるさとのこしのしらやまゆきげして、あぜもこみちも春の水、あゝい  
まごろはいまごろは。やまひにしんだ父のみを、なげくひまないおいめ  
から、買はれて人につれられてくに出たのはくれなるの桃の節句のあ  
くるあき。そのくれなるはいまどこに。やさしと人をおもふのさへも母  
にをかしたつみのやう。なにはの春のまちまたひけばなびかう青柳の  
みやびなりふりそのなかで、みはかたくなゝ木や石のはし。家やはたけ  
はとりもどしたがまだまなびやにゐる子ゆゑびんのみだれもかき上げす  
つげのをぐしもをれたまゝ。しらやまよいつふるさとへ。女役者にひと  
はなるわたしやけむりにうづもれて雪のしらいととりくらす。

## 戀 ごと 愛

むかし互に戀した處女があつた。

雌松の木の根に躑躅花さき

甘い岩梨の實のほふ溪間

圓やかな頸をわが腕にまかせ

春の遅日を短かいと泣いた。

けれども今は途中で逢うたかて

冷たい眼角小さくなりかけた丸髻は

ただ黙つてわたしに頷くばかり。

戀はしばらくの水の泡。

むかし互に好いたをとめがあつた。

しかし二人は戀もせなんだ。

東に別れ西に去り

浮世の浪にもまれ盡したのち



今も親しい友である。

その喜と笑ひ聲は白銀の鈴のやうこの耳に鳴り  
厨に萎びた薺のやうなわたしの憂と悲は  
淨いその膝の上にのせられる。  
愛はとこしへに輝く星の光。

### 霞が谷

#### 面影

生れた家の戀しきに  
霞が谷へきてみると  
小供が群れて遊んでる。  
いづれも知らぬ兒であるが  
古いなじみの顔ばかり。

あんたのうちはどこである  
あんたはだれの子であると  
昔の友の名をよぶと  
みないなますに笑つてる。

### 椋の木

竹馬すてゝこどもらが  
木によちのぼり實をとつた  
ささへ伐られていまはない。  
椋をたもとへいれてやり  
そとこそぐつたあの人も  
今は五人の母である。

### 石地藏



寺の住持の繪の筆で

あかむらさきにいろどられ  
地藏會に出る地藏さんは  
いつまで石であるのやら  
兎は父になり母になり  
さうして土になりゆくに。

瓦 屋

いきほひつけて駆けあがり  
一足飛びにとびおりた  
瓦の窯はやはりまだ  
黒い煙を立ててゐる。  
たがひに隠れみつげられ

さげびまはつた柴小屋は  
やはり松葉がつんである。  
けれどまはした桶の輪は  
どの干場にもみられない。  
やれごもしいて角力とつた  
友は瓦をたたいてる。

七 つ 橋

虹の七色ひというが  
いつ消えたのか昔から  
六つしかない七つ橋。  
よろこび怒いつくしみ  
憎みかなしみ樂の  
足に幾代々踏まれきて



まゝなくなつてゐるどの石も。  
けれどなんにも語らない。  
あさゆふとほつたあのころの  
戀も望もためいきも  
石はしるまいこの俺の。

### 生れた家

小山へあがりみおろすと  
生れた家が目に見える。  
みまいとしても目にはいる。  
豊太閤の桃山の  
城もはたけになつてゐる。  
城の瓦を焼いたちふ

先祖の家のかたもなく  
じぶんの家がうれたのも  
なかに流轉の世でないか。  
とは思つてもおもうても  
あの白壁の落ちてゐる  
倉とさうしてあの家を  
みると何だかしのれないが  
熱い涙がにじみ出る。

### 儒者の夢

雲ヶ畑に御獵場のあつた頃の作。御獵場は例年の狩獵中不祥事が起りやがて廢せられた。

ひたひの大きい目の敏い俺をば知らないて。  
知つてゐなければならぬ顔である。



おれの言葉はもう聲がないが

道を顧みない人達には

火柱立て、鳴るかみなりの響であつた。

一の字に結うた鬚を頂いて

蚯蚓のやうな假名字をかいたかたくな者は

その聲を非國家主義と名付けた。

するとお前の大祖父達は固陋の輩と罵つた。

お前にもその氣慨が傳つてるか。

王道と民衆政治とはやりかたが

ちがふが旨はおんなじだ。

俺の遺篇を幾回かお前は人に講じたか。

定めて語んじてゐるだらうおれの力ある名文を。

なに浩然の氣を養ふと、

それは儒生が青樓で耽溺する時の文句だよ。

惻隱の心は仁の端。

これこれそれは余りに奥すぎる、

もつとはじめじや、巻のはじめじや。

そこがおまへに聴きたさにおれは出て来た。

なに、そんなことは氣づかない、

今の世に處してそれが氣づけなきや、

お前は腐れものじりだ。

西の都の寒い枕邊を護るが爲めに立つてゐる

翠の屏風に雪がふる、あの北山の。

さあきけ梁の恵王章句、

『齊の宣王問うて曰く文王の圍は方七十里と

これあるか。對て曰く史傳に載せてござる……』



文王の御狩場は方七十里、草刈りもゆき柴刈もゆく。

雉あみも兎あみも皆がもてゆく』

これはお前はどうかいふか『古の人は民と共に楽しんで』『人とこれをば同じうした』

王道は民と共に楽しむ道である。

お前は獅子吼してこれが説けないか。

非忠君愛國思想だと佩劍に語り諛らふか。

棟梁の材は皮がひきむかれ、苗木は大方喰ひ枯らされ、

作つた稲や豆までもみな荒される。

それでも鐵砲一つ放して賊が仆せない。

はづかな冠と劍の樂は

多くの斧と鋤との苦である。

山中は雪深く途遠く、海のものなど稀である。

猪のあぶらみ焼いて食て太祖と趙普學ぶのも

已むにやめない樂である。

けれどもそれも適はない。

憐れと思はないか叉角の大物を

うち仆して射せられた若者を。

『則ち是れ方四十里、阱を國中につくる』のだ。

おれの聴い耳にはしきりに嗟きの聲がきこえる、

山のうしろの黎い首が難澁の書を出したけど

誰かゞそれをひつこめさせた。

お前は縦令聲ふるはしてごも

俺の句を活かして説げないか

孟子讀みの孟子知らずといはれないやう。

西の都に文王の靈園がある、



『イウ鹿伏すところイウ鹿濯々』

110

得意

枯木に帽子きせてやり

蒲公英黄いな道端で

寫生してゐる若い繪師。

村のうつくしお針子の

二人がそこでたち寄り

かきてのつらと畫の面と

はたけのつらを眺めわけ

何かさゝやき笑つてる。

しらぬ顔してかいてゐる

畫師の得意さ。

村ごまぢ

村のすまひの可笑しさや。

むかひの風呂はこちの風呂。

秋の祭になるちふと三日食たかてまだ残る

近處がくれる小豆餅。そしてあにいが持つてくる

街の醜い後家さんへ愛想づかしにかくあて字。

けれどうるさい事もある。

路添ひの田のむこのほど豆をうるてた

カナツンが言葉かけなんだづが高いちふ。

街のくらしのいやなこと。

うまいにほひの牛鍋もこつちの皿のものでない。

横町の姉がちよとよつてささやき話してるのに

111



とんとんかんかん箔屋と鍛冶屋。

日暮のかどの水撒も向ひとこちが半分づゝ。

けれど可笑しい事もある。

大きな聲でなごぞ屋が隣のおやぢ口説いてる、

かうしてゐては淋しから後妻を貰へ婆を世話しよと。

### 善い資本家と善い労働者

燃えてるやうな日光に今日もまた

壁も瓦も焦げさうな街のあさ、八時の鳴つた頃である。

縄で絡らんだ麥酒の空瓶を、

一重二重三重に、積んだ嵩高い荷車曳いて、

牛と牛追とが下つていつた、京から伏見へ。

打水にまだ濕つてる埃を蹴つてゆく勇しい自轉車、

麥藁帽子白靴、軒に吊つた籠のギイスの清いふし、

紫の茄子うりあるく竹田の若い衆、

水色の涼しい日傘は何處へゆく撞木町の女。

けれども牛と牛追はその追綱の細長い、

長い〜街道を、夜明からもう一里もきたらしい。

空地の檜の喬木が街の片側を侵してゐる、

その蔭へきた途端、牛は歩みをひたととどめた。

牛追は綱をふるつてびし〜と牛の横腹を二三遍叩いた。

併し意地強い黒牛は、その涼蔭から動くまいと、

盤石のやう立ちはだかつてゐる。

ふだんから牛の心をよく知つてゐる牛追は

あせつて再び追綱をふるふやうな事はしなかつた。

その追綱を牛に掛け靜かに車の梶をおろした。



さうして細い板の割れで、牛の後から脚へべつたりと  
ついでゐる汚い物を落してやつてゐる。  
それをすますと牛追は再び尻を叩くかと思ひの外に  
牛に引かれてその牛追は、自分も涼しい木の根にどかと腰掛け  
淑女の提げてるカバンほどある  
大きな煙草入を腰から抜いて、すばく煙草をすひ出した。  
街の真中をゆききする人と車の騒々しさも  
この朝涼を食つてゐる牛と牛車と牛追とには  
星の世界の事のやうかけもかまひもない事である。  
時はすぎゆく。五分、八分、十二分。  
黙つて立つてる牛の方が「親方、もうそろく  
行きかけてもいいぢやありませんか」といひたげな顔付きでゐる。  
二三十分すると牛追は遂に立ちあがつた。

そして萸薺一枚の日蔽をば牛の背中へ掛けてやつた。  
牛追がかちを上ると牛はすぐ前脚をあげた。  
さうして牛と牛追はゆるく伏見の町へ向つた。  
澁壺からあがつてきたよな資本家と  
草紙の紙衣きてるよな、黒い大きい労働者と。

### 私産と共産

秋風に門の一本の柿の實が熟して  
赤々と秋の日影に照り映へてゐる。  
一本しかないこの柿は芋の子ほどゐる町内の  
小さい児達の目の毒である。  
まだ青柿の眞夏から毎日隙をうかがつてきて  
石を投げる竹で落ち落す。



それなら採つてやらうかといくらか取つてやつたつて  
百羽の鶏を盗まれないやう

一羽の鶏を野狐に賄賂するにちがはない。  
ただその慾を煽るばかりだ。

けふも窓からふとみると

四人の小供がまた仰向いてをる。

『やい誰ぢや』その聲きくとかつてた奴は

木の端を地に投げすてて一目散に逃げさつた。

『今とつてよつた奴はなあ、八百龜の鶴やんゑ』

逃げない一人がかういつたから

その張本人を睨まへて『その木はお前が持つてきたんだらう』

圖星をさゝれたその小供は

『はあ、鞠がこの垣の中へ入つたので

これとつてなあ……』彼は此處までよい智慧を出したが

小供正直、その次の句がもう出て來ない。

外の二人を顧みて『やい、それからどうやつたいね』

大人を窓に待せておいて嘘の相談してくさる。

けれども誰もその嘘のあとを續けるものがない。

さまり悪さに一人をさして

『こいつもさきにとつてよつた。澁かつたんで吐き出しよつた』

さされた小供は反對に

『この人がとれと言ははつた』

噫一本の家の柿の木よ

七つ八歳の小供等が

その爲め何を今したか。

佛の遺した五戒の二つ、偷盜戒と妄語戒と



神が授けた十戒の盗むな、偽のあかしを立てるなの  
二つを木の下で破つた上に、己の罪を人に塗る  
卑怯な事さへ學んでゐたのだ。

若しこの一本の柿の木が俺の私有でなかつたら  
彼等に盗んだ罪もなく、偽をいふ必要もない。

噫大きな理想、初代基督教徒と禪僧の  
コムニニズムを讚美せよ。

けれど若しこの柿の木が吾家の私有でなかつたら  
秋の日和が恵んでくれる

甘いその實が味えやうか

自分の家でも盗みにくる小供でも。

涼風の吹くや吹かずにこの柿は

枝から葉までなくなつて

ゐなかつたらうか。

### 大地震の前後

愛を説き、理想をといて、年若い

男をんなの偶像になつてた人は、

土地と家屋の所有慾を自らすて、却つて同じ

女の愛の占有權をすてえなかつたその人は

九月一日の大天災の先驅となつて自らを滅した。

そして大地震が起つて都を燒盡した、

巖が崩れ、海嘯がよせ、温泉水滑かな山の街も

浪音清い海邊の里もおなじ運命に埋れた。

戀愛至上をといたものしりは

阿鼻叫喚の眞つ最中に、恐ろしい浪にさらはれて



大天災に小話を挿んだ。

親の愛、子の愛、兄弟の愛、人類社會の愛よりは  
男と女との戀愛を尊いものとしたその人は

自然の力で魂を天に返した。

帝都を救へ、帝都を再建せよと、

残る焰と灰燼の中に人は叫んでかけ集つた。

一日一夜で滅びた都を、廿年してまた建てるため

小さな力を揮ひはじめた。

この時誰がたはれたか。

自由戀愛の實行者、先づ愛に飽きた男女を勝利者として

疫病と飢餓に島國を陥さうとした豪の者、

道徳上の政治上の無政府主義者は

武人の蠻力によつて土に歸つた。

ギリシヤ思想と元祿思想に感溺し、

肉のことのみおもつてゐた吾等の兄弟姉妹達よ、

この三つの痛ましい犠牲者を悲み弔へ、

さうして思へ事の不思議を、

地震に先驅けた者は自らにより、

地震の眞中のものは天により、

それに殴りしたものは人によつて、

三人共に同じやう、世の常でない

黄泉の途をばいつたのである。

## 春 寒

白木格子の開閉の響まだ寒い白山湯

柱時計がいま四つ鳴つた。額になつてゐる繪附録の



その歌ひ女も汗をしきうな上り場や。  
 火鉢の前にあぐらかき、頭に湯氣をたててゐる  
 五十男よ、その背には大きな青い鬼の面。  
 素膚並べて隣には若い大工の髪長が  
 互に麥湯酌みかはしなに高らかな笑聲。  
 菱の帽子もかゝつてる鏡の前に立つたのは  
 頭に碧い桂の葉頂く若い裸姿か。  
 また瘠形の八字髭、濡れた筵で足拭いてると  
 すぐ後へ胸から腹まで熊のよな  
 毛深男が藍染の手拭のみで、踵を接して躍り出た。  
 また響く格子戸の音、駆けこんできた小兒二人は  
 着物脱ぐのももどかしきうに  
 競うて湯室へ没し去る。

もひとつのほの上り場は襦袢の紅や白粉の香や  
 縦に横に動く膚の柔らかな線。  
 番臺の後にするた信樂焼の  
 大甕の梅は蒸されて芬々と咲にほてゐる。  
 戸がまたあくどと外面から征矢を射かける如月の風。  
 街の往來は女童が抱へて歸る青葱にたまる淡雪、  
 そしてまた白を切つてる豆腐屋の  
 赤い手濡れた桶の上にちら／＼落ちてきえる幾片。

## 六道 詣

母がなくなつた翌年八月十日珍皇寺へ立寄つて

地獄極樂の古い繪は誰の筆やら。  
 小扇ひらめく洛中洛外の女人達。  
 はつ秋の暑さは眞夏の暑さより酷く、



葭簀屋の氷は高山コウサンの氷に似て涼し。  
 青い高野槇の葉新しい涙をそそぎ、  
 小さい卒塔婆の名ふるい思出をたどる。  
 たましひがまことに家に歸るものなら、  
 芋瓜なすびわれも供へて待ちたい思ひ。

初 秋

老の眼鏡、曆で秋を知つてまだ十日、  
 夏の火を消す雨風もない。  
 柔かな早稲の穂の青さ。  
 まん丸い子芋の白さ。  
 日盛手傳ひ井戸を浚へて去り、  
 夜の空博士星座を説きくる。

棚機を憐み盆を悲む。  
 人間の苦樂噫幾萬年か。

洛外小景

五高明大優勝戦の日

ベースボール戦終つて自動車還る。  
 日暮れかけて身は立つ洛外のまら角。  
 松の緑の叢雲は都名所園會の老木、  
 山の薄青い小波は山陽詩鈔の風景。  
 竹陰に大學認可のやどは窓を開き  
 夕涼に小兒遊泳のプールはしぶきおさめる。  
 足を濯ふひまない世美の小川の燈。  
 渡る出町の橋がいま葵橋とは。



## 反古

一三六

十七年前亡くなった、

父の手篋をふとあけてみて

静かな初夏の晝過ぎに自分は淋しい獨言

時の流轉をしきりに感じてをつた。

「詠草。何だこれは歌の詠草だ。

幸昌。おゝこれは代々幸の字をつけてきた父のあの名乗ぢやないか。

アツ歌が十ほど書いてある。

生涯歌を學んだなどと言も俺にはなんだ

父にこんな時代があつたのか。

そして明治のこの年は俺の生れた前年ぢや。

この十五枚ほど綴ぢてある

紙片はどうやら歴々の投票らしい。

上には「戸長月給の事。月給三圓也

賄村持市左衛門」と書いてある。

次にはまた「治郎右衛門年七十二圓

村賄は一切不承知」とかいてある。

おゝその次の利兵衛さんはどういつてるか。

十何枚共始めのと大同小異。

その頃は戸長の月給が三圓也。

さうして別の三圓で家族が食つてゆけたとみえる。

この書出しは何だらう。「覺一つ一圓五十錢

但しあん餅五十皮、七月十九日藤の餅」

この日は土用の入の前の日だ。

これは六つの山池を父が取締つてをつたその頃の



井手浚のけんづいである。

十五箇包一皮が参錢だ。安かつたなあ。

あゝあの藤の餅を二皮三皮いつでも餘分に

百姓達が泥手でおれの家へ持つてきた

あのうまかつた藤の餅。

この手紙には何か書いてある。

確かに覚えのある手跡。

「音楽と洋語のできない女をば私は娶る気がない」て

誰だい、こんな事を父親に答へた奴は。

ハツハツハア、才媛をねらつてをつた

才人さまか、ハツハツハア。

どれをよんでも何れをみても、みなその頃やあの時の

再びかへらぬ夢の名残だ。

## 自 覺

蟻は自ら小さいと象は自ら大きいと

思はないだろ。

噫々悲しい人間の自覺、

富で争ひ 名で憎み

なほその上にいつとも知れぬ 死にさへ慄く。

## 新 裏 切 り

かよわい母と五人の子との飢にたへかね浅間しい父の裏切 噫同盟の崩  
れ足。腕も心も鐵のよな あの人解けやうもない憤きく悲とつらさと  
は。大義親をもすてよと逼る たつにたたれぬこのえにし。親より可愛



いかと詰るきつてもきれぬこのきづな。菜つ葉の服で立寄つて親みあふたその仲がかたきのやうにならうとは。ああ同盟の崩れ足。貧はきりさく、貧は切り割くたましひまでも。

## 虫の世界

張物してゐた母を螫した  
舉動鋭い足長蜂が縁先をとぶ夏がまたきた。  
敵の飛行機みるやうに、  
自分は箒でかれを叩落す。  
松の緑の葉にへばりついて、  
突いても拂つても離れない五色の毛虫、  
小供がかびた菓子をつみにじるやう、  
自分はそれを蹂躪る。

庭の薄の向ふの溝べりに  
曲りくねつてゐる青白い蛇の醜さ。  
白銀で膨れて光る網袋の  
贈物みた賢い執政のやう、  
じぶんはそれに脊をむける。  
難攻不落の飛石の下の  
御城へ糧を運びこむ蟻の軍隊、  
夏草の青い狩衣をきて  
朗詠うたふ宮人ぎいす。  
自分のたましひも地に這ふ虫。  
夏は同じやうに、  
かうして暮す虫の世界に。



野 球 俳諧詩

一四二

社員店員のユニフォームに  
免じてカツとぶ緩い球。  
草に轉がる辨當の應援團が  
堅唾のんでる。

時 計

進んでゐるのか  
遅れてゐるのか  
眞晝頃六時指してる屋根の時計。  
自動車と活動寫眞とカフェーと  
取引所とで狂つてる  
近代都市よ屋根の時計よ。

星

天文學者が十億里の外に  
新しい星を發見したのと  
幼兒が一番星をみつけたのと  
我生活にどれ程の違ひがあらう。  
藍色が灰色になる夕暮の  
空を仰てふと考へる。

春

春のあいづの春のいかづち。  
地に這うてゐた薺がまた  
散るための花を急いでる。  
小さな虫が腐るための

一四三



小さい生命を營み出した。  
これからまだ幾千萬年繰返される  
こんな春だろ。

### 平和の圖

家鴨が五六羽水を潜り  
流を溯り下りなどして游でる。  
青い牧場に牛が立ち  
犢牛が臥てる一幅平和の圖。  
何の演説だスローガンだ。  
運命の槌の一撃で  
すぐに壊はれる蓄音機ぢやないか。

### 鮎

富士の裾野のやうに緩かな  
傾斜を作つた台板の上  
薄紅の桃の花これまぐろ鮎。  
青白い梨の花それは鯖。  
海苔卷は甲斐の黒水晶。  
役所歸の八級俸土木の兄や外交や  
角帯などが立ち並び  
貪り頬張るいそがしさ。  
内から握つて出すと外で食ふ。  
食ふと握るの競争に  
鮎はふえゆく減つてゆく。  
汚れた指にはそれ前に  
共同のフィンガボールもある



ナプキンもある。

### 難波の南海食堂で

施行を貰ひにゆくやうに一人宛

金のツレを滑べらしてゆく。

クツクに御馳走盛つて貰つてゐる

満員々々の食堂の午後。

フライやサラダやテキヤカツ

果物の客菓子コーヒ客。

取分け人の目を驚かす大食家達。

三皿の肉と泡立つ麥酒の大杯

なほ慾深うその横に並でも並べた

洋食皿の山盛飯。

みな「津の國の雑炊」の  
孫曾孫だろ。

### にがい顔

東から駆け出た自転車

南から飛出た自転車

街の四つ角。

詰襟服とアツシとは

車ぐるみ横に倒れた

すぐ起上つた。

「馬鹿野郎」「間ぬけ」は  
どちらの乗手でもない



時のはすみだ。  
けれど攫んだ砂を地に返し  
着物を振ふ忌々しさを  
どこへ向けやう。  
物をも言はず互に睨みにらみ  
車立て直した苦い顔二つ  
その苦い顔。

### 基督像

塊石畫伯から贈られた畫像。聖書の凡て疲れた者云々の聖語に依據して描かれた物で、原畫は關西學院に納められた。

噫人天の間に聳え立つ最も高いこの山嶽  
人の子そして神の御子。

帝王の宮殿に生れず貴族の子でなく、  
大工の家に育ち、大工の仕事場で  
額に腕に汗した若い魂。  
萬人に到達せられねばならないで  
それで達せられない理想人の具體。  
君が教へた短い祈は  
私共の光でありまた警策である。  
凡て疲れたる者重きを負ふ者は  
吾に來れとひろげられたこの御手に  
幾世の善人と悪人が泣き縋つたか。  
祈と隨喜とであの畫伯が  
寫し得た一枚の畫像にも  
私はその御姿に讚美を捧げ



その足下に跪づく。

### 弱者

將門や純友などの謀反に加擔して

その檄文も書いたとろ

菊水の旗を引裂き尊氏の部將に

仕へて雑兵になつてゐたとろ。

繪踏をば強ひられたなら

一番先に轉んだろ。

四十七士の仲間から逃出して

不忠不義士の一人になつたとろ。

袖下をしたゝか取つて關東へ

返忠した九條入道の眞似もしたとろ。

金一封に職工の血と汗をうる

ダラ幹のすそ分けさへも頂いたとろ

自分もそんな境遇だつたら。

税といふほどの税も納めず

活動社會から離れて暮しながら

過ぎこし方を顧みると、

誇より悔ばつかりの生涯である。

自分は七たびは愚か今いち度でも

人生を踏直してみたいと思はない

こんな弱いからだと魂とでは。

### 箇人

天文學者も時計の機械は作れない。



物理學者も河に鐵橋は架けられない。  
細菌學者も内臟から悪い腫物が切りとれない。  
農夫は諸を作つても電車は作れない。  
農夫も商人も學者でさへも  
最新の文化は享樂できるけれど  
人間の總ての知識と技とを究め盡せない。  
文化社會もその箇人は  
太古蒙昧の民とどれだけ違ふか。  
あゝ小さい箇人よ。  
けれども小さい箇人のニュートンと、  
エチソンが若し生れなんたら  
小さい鍛冶屋がゐなんたら  
小さい下駄師がなかつたら――

解りきつた社會機構をふと思ひ。  
箇人を侮り箇人を尊ぶ。

唐 新 涼

樂觀すれば何もかもよい萬物の流轉。  
秋が訪れてきた殘暑新涼の間に。  
池は驟雨に随つて蓮の花墜ち、  
梢は夕陽を含んで柿の實が色づく。  
一脚の藤椅子瘦せた軀からだを托し、  
滿架の書籍も古びては讀むに堪へない。  
藝と呼び道と名づけるも元來遊戯だが、  
猶勝る忿怒と争鬪に一生を費すよりは。



## 水 郷

風は水郷に入つて已に秋だ  
人は知るか吾家課外の課を  
網を投げて銀鱗を漁り  
舟に棹して青菱をたぐる  
歌は消えゆく葦叢の外  
飯は熟す蓼のなごさに  
水も空もたゞ一碧  
遮莫暗い街のジャズ、ウイスキー

## 炭 團

その前身は山奥で  
雲を呼び雨を起した大木じやないか。

一朝炭に焼かれて市に賣られ  
更に粉炭に飾ひ落されて  
夏の炎天鼻黒小僧に丸められ  
今の炭團になつたのである。  
面の黒さは赤道直下のあのアフリカにすむ  
ニーグロでさへ及ばない。  
その圓い姿は王の宮殿に  
會て爆裂したこともなく  
詩人音楽家などとなへる族のやうに  
歪んだねぢけた顔に白粉し  
怪しな聲して歌つたこともない。  
夏は人々に敬して遠ざけられ  
そうして烟管のさきで突つかれる。



貧しい女や弱い小供を  
夜通し安らかに眠らせながら  
朝になつても嘘お前は  
唯一言の感謝もうけず  
黙つてくゝまた土になる。

親 子

大きな學校の大騒動。  
應接室の戸があくと  
白髪の大先輩の顔がみえる。  
その騒ぎをば鎮めるために  
來てるのが遠い市から。  
事務所の人等は囁いていふ

「今夜一晩かゝつてもむつかしからう  
あの親が子を説き伏せてしまふには」  
親は教育家先輩騒ぎの調停者、  
子は騒動の領袖株。  
花散つて春か夏かゞ知れぬ日の  
噫この悲劇か喜劇か知れぬ一幕。

み こと ば

幼い時にお前がさう  
教へたぢやないか  
酒と煙草は養生に害ありと。  
これは一人の貴婦人が  
それに就て尋ねた時の



御答へた一天萬乗の若い天子さまの。  
國民ら、心に銘せよ

この短い御言葉を。

臣も民もきいた事をすぐ忘れる。

臣は民は口ばかりで行はない。

勿體なくないか若い天子様に。

### 姪策馬が滿洲獨立守備 隊へ赴任した時

匪賊相次で降り、人はめをみはつて西を望む。

萬骨むかし國に殉し、一劍いま家を辭す、

北滿こほり馬に滴り、外蒙くさ羊を牧ふ。

四省五族みな兄弟。武を振ふは皇道を弘めるがため

### 老樹の賛

老樹喬木、吾は汝を禮讚する。

やきつけるよな暑い夏は

涼しい陰を大地にしき

時ならぬ雨と雪とには途ゆく人に宿を與へる。

小鳥を棲しめるに宜しく

馬を繋ぐにも宜し。

宮殿も城廓も喬木あつてこそ

その威嚴を加へる。

萬金を抛つて金屋を築ても

老樹があつて寂ひと静かさを添へなければ

主人の鄙しい素性と淺薄な趣味とを



裏切り示すにすぎないのだ。

深山幽谷の大木は

伐れて棟梁の材となり

神社佛閣を莊嚴にする。

老樹の齡は千年をこえる。

人間の生命と比べみよ。

王朝衰へ武家亡び封建制度が壊れても、

人間の閑葛藤を冷視して

悠然富士の高根と對坐するは

あの銀杏の老木でないか。

楠の巨木は倒れても

化石して禁庭の橋となる。

誰か人間の枯骨を珍重するか。

我は老樹を羨み喬木に耻る

昔われ霞ヶ谷の家に育ち

老樹と脩竹とは友であつた。

竹を傳うて椋の大木に登り

枝ぐち實をば折取つた。

その頃は價值ある物の價を知らなんだ

今われ零落して街裏にすみ、

無花果枳殻棕櫚木犀に隣して

はじめて老樹喬木の價值を感じた。

### エレベーター

エレベーターの口に押合ふ

人間のつち、砂、苔、萱。



それを押分け一人宛  
ちよろくと  
中から清水が流れ出てくる。

### 戀　　ご　　愛

生命の大樹がすすくと林をなして園に村立ち  
白銀の百合わうごんの金蓮花が  
みかほの光に照らされて匂ひ、  
常若の天の使が聲をあはせ  
純白な雲のべーチに星を聯ねてかいてある  
歡びの譜を歌ふそこに  
童男童女の戀はまだある。  
ひとよさ春の雷が土の中にねてゐる蛙の夢を破り、

微温いこち風があしたの雨を送り、  
長い尾を地にひく鶏の  
とやの傍をぶちの犬が小走りにはせさり、  
ぬれてさいた梨の花がまた濡れて  
地に落ちてゐるその下に  
夫婦の愛は青い芽をふき出した。

### 大　噴　火

浅間の山は濛々と地獄の烟を天に向け、  
一直線に吐き出してゐる。  
赤味を帯びた細い月が今しも山に吞まれかけてる  
物凄　い丑みつ時、上州側の山裾の  
小家に燈がまだ燃えてゐる。



その部屋の中で女は耳と目をそばだて、  
何かの音を待つてゐる。

色が白うて縹緖好しの女房の笑みに酒を強られた

主人は深い眠に陥ちてゐる。あゝその燈火のよな危い命。

女房は村の間男と語らうて今宵亭主を絞め殺し、

金目の物を搔凌へ、江戸へ出奔しやうとしてゐるのである。

とんとんと戸を叩く小さい音がきこえた。

女房は部屋からそと立つた。あゝ燈火の危ない命。

同じ時刻に信洲側の麓の村の大きな家の

倉の屋根に人が這うてゐた。

棟近い處に大きな穴があき、瓦が澤山積んである。

屋根の下から聲がして「いゝか兄弟、これも金箱だ

小袖が少しまだあるが、太吉も俺ももう出るよ」

積んだ瓦の傍の眞黒な影は三つになつた。

同じ時刻にまた外の村の境目、十六七の小娘が

母の夜中の腹痛に隣在所の薬屋へ

薬を買ひにいつたその歸り途、

博奕場から歸る雲助の

毛だらけの腕と股との下になつてゐた。

あゝもう一瞬で無残や花は雫み躪られる。

丁度三つのこの出来事が起つたその時その刹那に、

地獄の烟を吐いてゐた淺間の山の頂は

萬雷の響となつて四方へ飛んだ。

少女は淨い處女であつた。荷物はその儘遺つてあつた。

亭主は翌る日も生きてゐた。

二三日する色白のその妻は亭主を助けて家を繕つてゐた。



盗人と間夫と雲助はお救小屋で神妙に働いてゐた。  
 おゝ罪悪よ、そんなに弱いなりにしやがつて！  
 石と瓦と白刃の中で妙法を説いた日蓮坊、  
 己を焼き殺す火に真木を添へる  
 兄弟の堅い信仰をほめたゝへたホス。  
 おゝ罪悪よ、手前等何だ  
 そんなに弱いざましやがつて。

ラーネッド博士夫妻の歸國を送る詞

送別會に歌はれた「またあふ日まで」の譜にあはせて

設けのむしろに 袂を聯ねて  
 わかれの言葉は 溢れ落ちる涙  
 嬉し涙か 悲しいそれか

わけはしらぬ たゞ溢れたなみだ  
 色づいた麥を 神のよいしもべ  
 取いて歸る 嬉しい日でないか  
 うれし涙か 悲しいそれか  
 わけはしらぬ たゞ溢れた涙  
 徳みち年たる 吾家の師父を  
 とこしへに送る 悲しい日でないか  
 嬉し涙か 悲しいそれか  
 わけはしらぬ たゞあふれた涙  
 この世で再び あふ日はあるまい  
 健かにゐませ 二人がいつまでも  
 うれし涙か 悲しいそれか



わけはしらぬ たゞあふれた涙

### 閑庭花を看る

わられた酒甕、土に泥みれた折の飯粒。

吉野らんざんたゞ狂亂の巷

人は知らぬか閑庭で獨り花看る趣を。

### 薄 暑

春のかたみの残花幾片。

岩陰も日がもう熱い。

泉で洗ふ蔵手折つて汚れた手。

### 春末夏初

遅々としてきた春はまた

匆々としていそぎ歸つた。

葉裏の花も數へるばかり。

咲いたがために薺の莖も瘠せてきた。

酒に似て泡だつ新緑、

水よりも碧い幽草。

自分は淋しく

薄墨色の碼頭のやうな

愁と語る暗い書齋で。

### 同

草長け水湧いて日がまた暑い。

ラヂオが送る世間の塵うたかた。

琴をきいて耳の拙さを忘れ、



薬を嘗めて病の深さを憶ふ。  
 蝶の夢花とちり、  
 蠶の功繭に成る。  
 涅槃もよい不斷の創造もよい。  
 橄欖の山菩提樹の陰。

避暑

硯の田耕しやめて  
 心を養ひ手足を緩うす。  
 庭の樹に冷された風は枕に落ち  
 井水に浸つた西瓜が盆に上る。  
 目に光る金字表紙を抛ち  
 手に當る雲形短冊に臨む。

山の雨に撲れず海の波をきらす  
 心頭に作る小さいこの避暑の家。

五月

暮春の譜をまくるとその次は茶摘女の歌。  
 青緑の大幅もよく蛙の小品もよい。  
 山から歸つて釣瓶から飲む水の冷たさ。  
 井戸端に藪と虎杖をつけといて足袋ぬぎすてる。

涅槃か永生か

イギリスの詩人は言つた死は眠だと。  
 安らかな眠にまさる幸福はない。  
 けれどまた快い夢をみるのも幸である。  
 自分は眠をも愛し永生をも欲つする。



## 星

一七二

星になりたい。

常世亡びぬ星になりたい。

喜び悲しみ泣き笑ひ

悪み争ひに疲れた目で

下界から清い光を日暮仰ぐ

星になりたいあの星に。

## 同

あんなに清く光つて

あんなに永遠に新しい星に

魂がなからうか。

魂があると自ら賢がる

人間も星と同じい土じやないか。  
土に靈魂があるか土か魂か。  
星は黙つて光つてる。

## アヘンの宗教

石山本願寺の門徒衆は

勇んで佛敵の刃にちぬられた。

島原大村の切支丹は

天主を讚美して十字架に掛つた。

みんな來世を信じたからだ。

宗教をアヘンと冷笑した口舌の雄は

五年八年の刑に慄ひ上り

將棋倒しに轉んだぢやないか。

一七三



アヘンを吸はない革命家の脆き醜さ。

一七四

### 百貨店 俳諧詩

エスカレータに押上げられる。エレベーターに吊上げられる。  
極楽浄土だ。ほしい物は何でも手に入る…銭さへ出せば。  
尖端的な写真機、ラヂオ、電気風呂。鈍端的な錦紗、大島、博多帯。  
あつ麗人が来た…鏡に映つた妻の艶姿。

同

虹よりも一層複雑なオーケストラみる百貨店の賑ひ。  
古財布でも銭ない者がなく、處女面せうにょめんして兒のある人もある。  
魚を學んで食料品の地階を泳ぎ廻り、鳥に化して植木店の七階に羽を休める。  
幸に權貴の身でない故に、却つて衆と樂めるこの清福が。

### 謎の愁 エロ三首の一

縞の羽織の力に戀した。  
菱の帽子の才を愛した。  
そうして艶な帯の下に  
謎の愁を孕んでる。

### 大きな手

主観は即ち客観か  
思想は直ちに實在か。  
論師や師家の銅鑼聲も  
徹底しない吾耳に。  
けれども自分は心に感じる

一七五



日月星辰を鑄造し

花鳥草木を繪畫した大きな手

そのみえない力の實在を。

再 會

三十年後ふと夢にみて不思議がる。

町の學校の當番に

二人して雑巾をしぼつた醫者の娘。

今は閣下の夫人だと

いつか噂にきいた小娘の面影。

雨 風 の 日

雨風の日

花のちつてしまつた

公園を通る。

濡れないものは鴛鴦と

菖蒲とばかり。

初 冬

馬を送り牛を送り車を送り

月日を送る心の欲するまゝに。

露に霜に殘菊を憐み

晴に雨に山茶花を愛す。

老婢は納屋で大根に糠し

少女が母屋から味噌豆くれる。

まだ灰にならぬか名利の慾



詩集にかさなる小家計簿。

### 壁 一 重

大和大路の古道の屋並み

壁一重隣ではいま醫者が

死んだ主人の目を蓋させてをる。

隣では大きな産聲

産婆が赤いからだを湯浴みさせてゐる。

咽び泣く聲華やかな笑聲

### 飲 食

雪より白いエプロンの閃き。

男も女も老もこどもも

五月の野の花のやう蝶のやう

悦びにみち満ちてゐる。

飲食は最大多数の最大幸福

君は麥酒をとれわれは草餅。

### 四 月

四月は浮かれ易い、死も忘れ易い。

物は忘れる方が幸ちやないか。

花陰で歌、鮮、酒、さうして女。

酔うてオーマカヤム説く者がある。

オはベルシアの天文學者兼詩人で絶望的快樂主義者

### 訃

早涼が来た、誰かゞ死んだ。夜明早く

幽かな人聲、木魚の哀韻。



誰か死んだ。「死」の爺が  
けふも日なしの金取つてゆく。

### 唐詩選畫本

唐詩選畫本の五絶五冊は

汲んでも思出の盡きない私の井戸である。

祖母と父母、同胞友達、友の家々

小松を引いた赤い小山

雲雀の巢を探つた緑の野など

幼い時が藏さくれてゐる黄表紙の家。

繪のやうな字と字のやうな畫とで

白飴黒砂糖くどい雜菓子の外に

あまい詩を始めて味はせた本。

竹馬桶の輪赤青に塗つた木のコマを  
暫くすてさせた小さい玩具。

「囊中自ら錢有り」や

「趙氏連城の壁」などが

今も私を呼び出しにくる。

そして「宿昔青雲の志

蹉跎たり白髮の年」の意が

今こそ全幅解つてきてゐる。

### 小生活

一年僅かに税を納め

三日また短い詩を得た。

車を避けて畫を賣る軒に停り



客に對つて碑をすつた寺を語る。  
花の名を小さく鉢に立て  
藁の灰で細かく爐を埋める。  
暗い書齋が忽ち明るくなつた。  
おのづから點る夕の燈。

# 附 録

## 霞谷村舎絶句

自明治丁酉至昭和甲戌

### 紀 元 節

又逢<sup>フ</sup>佳節<sup>ニ</sup>對<sup>ス</sup>匏樽<sup>一</sup>。楊柳梅花春有<sup>レ</sup>痕。沿<sup>レ</sup>例<sup>ニ</sup>先生陳<sup>ニ</sup>俎豆<sup>一</sup>。肅然說  
起<sup>ス</sup>古樞原。

### 客 中 早 春

雨餘ノ草色上<sup>ニ</sup>寒墟<sup>一</sup>。林外又看<sup>ル</sup>停<sup>ニ</sup>小車<sup>一</sup>。慵<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>向<sup>ニ</sup>兒童<sup>一</sup>課<sup>スル</sup>中<sup>ニ</sup>蠻語<sup>ヲ</sup>上<sup>シ</sup>。  
洛城正<sup>ニ</sup>是訪<sup>レ</sup>梅初<sup>一</sup>。

### 梅仙窟觀盆梅贈生駒國手

滿室ノ香風手劈<sup>レ</sup>箋<sup>ヲ</sup>。鍊<sup>レ</sup>丹膏<sup>ヲ</sup>藥<sup>ヲ</sup>學<sup>ニ</sup>神仙<sup>一</sup>。回生ノ妙術存<sup>ニ</sup>餘力<sup>ヲ</sup>。開<sup>キ</sup>得<sup>ク</sup>



梅花、小洞天。

春 寒

剪々カク東風吹ケ雪頻ナリ。爐邊閑臥ス病餘ノ身。殘寒作レ惡ヲ知ル何ノ意。瘦ニ了シ梅花一愁ニ殺ス人一。

嬉 春 詞

輕羅小扇影相從フ。花ハ滿ニ東山ニ春色濃カナリ。隊々誰ガ家ノ行樂ノ女。宮前忽チ別レ寺前ニ逢フ。

元政庵春日

追ニ想シ當年一感自長シ。依然梅竹繞ニ茅堂一。四方來リ詣ヅ開山忌。脈々春風遺墨香シ。

滿座ノ詞人誰カ最モ先シ。淡茶一啜試ニ新篇一。風流聞ク道ラ長ヘ如レ此。花落チ花開ク二百年。

茅庵麗日玉蘭開。一樹々頭香雪堆シ。復ダ恐ル東風吹ケ暖マ甚シ。明朝細雨

撲レ花ヲ來ル。

依稀タル殘月照ス烏巾一。曉ニ過ニ山門一路正ニ新ナリ。老健吾師手ヲ揮ヒ箒ヲ。竹陰輕ク掃フ落花塵。

又看落花ノ浮フ寶池ニ。書窓春晝漏移ル遲シ。爭レ棋ヲ聲ハ響ク幽篁ノ裡。此ハ是レ師僧不レ在ラ時。

訪台巖上人

半日對シ師ニ談是耽ル。夕陽影淡ウシ帶ニ烟嵐一。春風愛ス此精廬ノ寂ク。修竹一庭花一龕。

春日書懷

桃季年々花自ツ開ク。獨憐ム多病却テ無キ才。春風吹テ醒ス池塘ノ夢。一縷ノ藥烟爐欲ス灰ナラント。

蠶 婦 詞

吳蠶箔上玉成ス堆。桑樹陰濃カニシテ雨始メ聞ケ。誰カ識ラン繭絲輸出ノ利。總テ



從<sub>レ</sub>賤女ノ女功<sub>一</sub>來<sub>ル</sub>。

歸家

累歲外遊零落<sub>シテ</sub>歸<sub>ル</sub>。風<sub>ハ</sub>吹<sub>テ</sub>綠樹<sub>ヲ</sub>雨紛<sub>ニ</sub>。黃金無<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>誇<sub>ニ</sub>鄉曲<sub>一</sub>。病骨  
愁心舊敝衣。

暑夕不寐

溽暑依然<sub>ツリ</sub>日<sub>ノ</sub>落<sub>ル</sub>初。飢蚊撲<sub>レ</sub>面<sub>ヲ</sub>滿<sub>ニ</sub>茅廬<sub>一</sub>。山人何<sub>ノ</sub>術<sub>ガ</sub>忘<sub>ル</sub>煩熱<sub>ヲ</sub>。帳裏<sub>ノ</sub>  
涼燈數卷<sub>ノ</sub>書。

納涼詞

水上<sub>ノ</sub>涼棚冷<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>秋。竹枝清唱酒消<sub>レ</sub>愁<sub>ヲ</sub>。雛髮原<sub>ト</sub>自<sub>ラ</sub>多<sub>ニ</sub>嬌態<sub>一</sub>。手  
攝<sub>ニ</sub>紅裳<sub>一</sub>涉<sub>ニ</sub>淺流<sub>一</sub>。

晃山戰場原

暉<sub>々</sub>タル曉日照<sub>ニ</sub>原頭<sub>一</sub>。露冷<sub>ガ</sub>風香<sub>ウ</sub>シテ爽氣浮<sub>ブ</sub>。六月人間方<sub>ニ</sub>苦熱<sub>ヲ</sub>。山  
中已<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>野花<sub>ノ</sub>秋<sub>ナリ</sub>。

函嶺途上

風<sub>ハ</sub>吹<sub>テ</sub>短褐<sub>一</sub>客身孤<sub>ナリ</sub>。上<sub>リ</sub>盡<sub>ス</sub>函山數里<sub>ノ</sub>途。前路料<sub>リ</sub>知<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>易<sub>キ</sub>。原  
頭立<sub>テ</sub>杖。望<sub>ニ</sub>蘆湖<sub>一</sub>。

風雨有感

黑冥濛裏雨兼<sub>レ</sub>風。彷彿<sub>ク</sub>蚊龍<sub>ノ</sub>飛<sub>ニ</sub>上<sub>ス</sub>ニ空<sub>ニ</sub>。借問<sub>ス</sub>西隣<sub>ノ</sub>蒿目<sub>ノ</sub>日。那邊<sub>ノ</sub>  
大澤<sub>ヲ</sub>起<sub>ニ</sub>英雄<sub>一</sub>。

秋夜宿永平寺

鐘磬出<sub>レ</sub>雲幽更<sub>ニ</sub>幽<sub>ナリ</sub>。通宵祇<sub>ニ</sub>合<sub>サ</sub>ニ話<sub>ニ</sub>清遊<sub>一</sub>。一溪<sub>ノ</sub>流水滿山<sub>ノ</sub>月。夢<sub>ハ</sub>冷<sub>カ</sub>ナリ  
永平禪寺<sub>ノ</sub>秋。

雪晴出城

夜來<sub>ノ</sub>積玉遍<sub>ニ</sub>郊坰<sub>一</sub>。曉起出<sub>レ</sub>門<sub>ヲ</sub>行<sub>ク</sub>且<sub>ツ</sub>停<sub>ル</sub>。既<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>下村孃<sub>ノ</sub>摘<sub>レ</sub>春去<sub>ル</sub>上<sub>。</sub>  
小籃帶<sub>レ</sub>雪<sub>ヲ</sub>野芹青<sub>シ</sub>。

神港雜詩十首錄一



嗚呼碑畔幾回遊。又想當年逐客愁。磅礴一篇忠憤氣。與公遺烈共千秋。

一八八

寄姪策馬在黑河

憶家知汝夢相牽。故國迢々路八千。只是雄心制難得。黑龍江上復迎年。

江心凍合雪花飄。城塞夜深燈欲消。遠守朔邊兼守歲。一聲鐵笛是元朝。

皇軍士氣本無雙。猶枕于戈助友邦。雪壓邊城敵何處。在。胡笳夕度黑龍江。

舊調新聲

折 蕨稻屋課題

魁を人にゆづりて折ゆけど蕨ははやも手にあまりけり

岡 雉稻の屋

妹とわがならびが岡の花つゝし折つゝゆけばさゝすなくなり

名 所 霞

愛宕のみ谷間にいさゝ雪みえて淀鳥羽竹田かすむ春かな

山家春曙

くちそぐ寛の水に花ちりて山櫻戸の夜はあけん



とす

春の歌よみける中に

のどかなる日和つゞきて花曇つひには雨となり  
けるかな

浦花

須磨明石浦の松原たえくにしろきはさける櫻な  
りけり

風前花

行春の姿をみよとちりそめし花にや風のふきそよ  
ぐらむ

花漸 稀深草會

大方は若葉となりて山櫻ちるさへ稀になりける  
かな

早夏 水稻の屋

夏のきて菖蒲生ひたつせゝらきの水やにほひを野  
に流すらむ

夕水 鷄

ゆふまぐれさを忘れし柴の戸を叩く水鷄におも  
ひ出でつゝ

聽 水深草會

夜もすがら枕にひゞく溪水のそのみなもとを明日  
や探くらむ

泉聲入夜寒 同

夜となれば音さへ寒しひとすぢの垂永に似たる吹  
上げの水

野 夕立



富士詣おくれし群ぞあひにける裾野を過るゆふだ  
ちの雨

叡山避暑同

大比叡の杉のこの夏の夏すまひ朝の祈のきよく涼  
しき

台巖上人に随ひて須磨明石に遊びける  
時舞子濱に宿りて

浪の音にねられざりけり淡路嶋通ふ千鳥の聲なら  
なくに

野霧

天地の分れしときぞおもはるゝさざりはれゆく野  
邊のけしきに

秋水

夕日さす沼の澤瀉やゝしをれ透き通りたる秋の水

かな

箕面観楓深草會

暮ねきし箕面の山のもみぢ葉はたまのしよきに滯  
れつゝぞ照る

擇紅葉稻の屋

しらさぬをきぬたにのせて紅葉の色深さをぞ賤は  
すりける

短日稲の屋

憲暗く時雨さへしてとなり女のをるしづ機のこの  
ひ短し

冬の日はなどかく暮れてあさぬれし落葉ひるまの  
短かるらむ

雪中待春稲の屋



若菜つむ春を待たる、雪のうちに小野の炭竈すみ  
なれし身も

野馬 嘶稻の屋

夕まくれ放ち飼せるその駒のいなくみれば月毛  
なりけり

深山 猪稻の屋

人しらぬ深山の奥のふし猪すらふみゆく道のある  
にあらずや

彫虫

彫虫の末枝だなんて儒者の鸚鵡になりやはり虫彫  
る菩薩をも刻む

観る目にはこれもわびしい萬緑の中にとけこむ残

花いくひら

渡された体温表にけふもまた北斗七星の圖をかい  
てゆく

鞍馬山みちづれになつてくれた女をさきにやり十  
歩にひとやすみする奥の院の道

歴史の墓へ會津籠城の老女を葬る八十年は長い短  
い 新嶋八重子刀自の葬式に

雨漠々あめと紫薊の五月野をぬれ濡れたどる白  
すあしが



金木犀は光琳の屏風に銀木犀は蕪村のに塗つたら  
と陋屋の日記

白や赤や蝶々ほどの花ゆゑに倒れかけてる細いコ  
スモスの姿

葉鶏頭がひとひら靡くよな秋晴れて葉など動かす  
風もないのに

かまきりが鎌たてゝゐる寂として人影もない納屋  
の板戸に

落葉寒草の裏残菊が芬としてなほ薫る王道社會主

義さく一陽來復近い日

鏡に映つた兩鬢の霜を掃く細い鋏刀枝藝天女口説  
く吾戀はやまぬ

山を出てもう幾年かこの春は錢出して買ふ一把の  
わらび

二十五年の日記翻へしけふもかく三十六年の病を  
題に

花に勝る綠陰幽草の中に病臥して獨り詩を刪る眞  
晝靜かに



砂弄りしてると日記にかいた妹のわすれがたみも  
はたちを過ぎた

一九八

死は何だ死は大晦日の夜の一刹那零時一秒は來世  
のいのちだ

一生涯すべての教の祈禱を陋とし天と醫術と薬と  
を信じて生きてきた

思ひだけでも涼しいやうにわが陋室に伊豫すだれ  
などいふものかける

寒瘦の儒者を學んで年のくれすこし疵があつて安

い唐墨を買ふ

友は去つた「潮汐南に連る赤道洋」と少年の時誦  
した椰子碧い島へ

大暴風で森は老樹喬木が縦横に倒れてる戦すんだ  
あとの人馬のやうに

寒い日も街は遮二無二働く人のゆきゝとに角食つ  
ていてそして死ぬるがために

割りきれぬ數としり／＼人間は算盤投げずになほ  
わつてゆく

一九九



社會鍋かね少しばかりさしいれて今年も心の税を納める。

藥湯の方をラヂオできいてつけてゐる爐邊に遣ひよる老を感じる。

昭和十年四月二十五日印刷  
昭和十年五月五日發行

定價壹圓五拾錢

霞村  
長及  
歌詩  
集選

不許復製

著者	青山霞村
發行者	東京市澁谷區代官山町十一番地 和田みち
印刷者	東京市四谷區坂町一二二番地 塚本藏治

發行所

圖書出版

東京市本郷區眞砂町一五番地

素人社書屋

振替東京一五九九四番



終